

Tangolandia

秋
2014

日本タンゴ・アカデミー会報

(HP : <http://tangoacademy.jp/>)



目次

日本タンゴ・アカデミーと日本アルゼンチンタンゴ連盟	飯塚久夫	2
わたしのひそかに愛するタンゴ La abandoné y no sabía (心ならずも)	高場将美	4
想い出のタンゴ喫茶巡り(最終回) 神田神保町“ミロンカ”	中村尚文・脇田富水彦	8
私の愛聴盤(第6回)	加藤光夫	11
タンゴこぼれ話(第2回)	弓田綾子	13
カンパラーチェ逍遥(第1回)	島崎長次郎	16
大橋英夫さんを悼む	佐藤光男	20
追悼ビルヒニア・ルーケ	海部英一郎	22
グロリア・米山“新たな音楽の世界へ”(5/14)	弓田綾子	26
第50回合宿コンサート(主催:秋田中南米音楽同好会)より(5/27)	宮本政樹	28
早川真平生誕100周年記念コンサート「タンゴの黄金時代」(6/25)	齋藤富士郎	33
日本に根を下ろした「プエノスアイレスのマリア」(7/15)	大類善啓	35
東京バンドネオン倶楽部 第17回演奏会を聴く(9/26)	大澤 寛	40
トリオ・ロス・ファンダンゴス演奏会を聴く(9/28)	大澤 寛・齋藤富士郎	43
ジャカランダはタンゴの花	山本嘉子	45
タンゴと私 出会いから今日まで	海津喜八郎	49
アルゼンチン・タンゴへの想い	小澤 忠	51
閑談 私の和製タンゴ考	佐々木秋雄	53
古いタンゴ楽譜集あれこれ	清水 裕	57
会員アンケート「Chiqué 3曲選」第2回発表		59
新・訳詞コーナー「Chiqué (2)」	大澤 寛	63

「日本タンゴ・アカデミー」と 「日本アルゼンチンタンゴ連盟」

会長 飯塚 久夫

去る4月、一般社団法人「日本アルゼンチンタンゴ連盟」が設立され、7月には国家公安委員会の認定を得て、いわゆる風俗営業法から除外される団体として公示された。この団体の設立に関わったので、その設立の経緯、「日本タンゴ・アカデミー」との関係、今後の日本タンゴ界への想いを述べさせて頂く。

タンゴを巡るこの10年来の大きな動きは、歴史上初めて（社交ダンスでない）アルゼンチンタンゴ・ダンスが世界的ブームを続けているということであろう。その端緒は、1980年代からのショー“タンゴ・アルゼンチーノ”がパリそしてブロードウェイで大ヒットしたということにあり、2003年には、当時のブエノスアイレス市長が“タンゴ・ダンス世界選手権大会”を始め、毎年8月には世界100都市から10万人以上の参加者がブエノスアイレスに集まる。演奏家や歌手もミロンガに呼ばれる機会が増え、若者達がタンゴの世界に戻ってきた。従来、ダンス人はタンゴ音楽そのものを深く聴くことは少なかったが、タンゴ・ダンスは音楽もしっかり聴いてその情感をいかに表現出来るかが最も重要であるという認識が広まってきた。踊りと音楽の一体性というタンゴの原点が甦りつつある。



ところが日本ではここ数年、麻薬や騒音などによる“クラブ”の風営法違反による摘発が頻発した。この法律は戦後間もない昭和23年に出来て、売春や薬物を防止することを目的としており、キャバレーやナイトクラブ、ダンスホールなどの営業も許可制としてきた。しかし、社交ダンスの二団体に所属するダンス教師や教室だけはこの風営法の規制を直接受けることはなくなっていた。いわば、自主的な民間団体が自己規制で秩序を保つというやり方だ。そのやり方を社交ダンスの二団体だけでなく、タンゴやサルサなどのペア・ダンス営業にも適用するという風営法改正が一昨年11月末に行われた。そこでアルゼンチンタンゴ・ダンスを営業としている人（教師）たちも法人を作って、その法人が国家公安委員会の認定機関となることを迫られた。そうすれば、社交ダンス二団体と同じように民間自主規制の世界になる。しかし、教師も生徒もミロンガ主催者も、今まで何も無くてよかったのに、何故今更、団体なんか作る必要があるのだ？と疑問の渦がわいた。在日アルゼンチン人でダンス教師をやっている人もいる。とりわけそうした人たちからすると、風営法でダンスを縛るなんてとんでもない！ということだ。本当は、風営法はダンスを規制しているのではなく、あくまでその営業行為の規制なのだが、そんなことは簡単に分からない。

ダンス関係者の中で侃々諤々の議論が続いた。そして行き着いたのは、風営法規制から免れることもさることながら、より大事なことは、この日本が“タンゴの第二の故郷”とまでいわれる所以は何か？それまでラテンアメリカ人でないとなれなかったサロン・ダンスの世界チャンピオンを日本が輩出出来たのは何故か？などをよく考えながら、タンゴの本質を日本でもっともっと大事にしていこうという認識の一致だ。

こうした紆余曲折の結果「日本アルゼンチンタンゴ連盟」が設立された。ダンスを中心に、世界無形文化遺産にもなったタンゴ文化の普及・発展の中心組織として活動していこうという理念も確立した。この法人の目的は『アルゼンチンタンゴの普及と健全な発展に貢献するため、タンゴに係る音楽・舞踊文化の高揚を図るとともに、タンゴダンス教師、ダンサーの育成と質の向上及びタンゴ教授所の業務の適正化、並びにアルゼンチンをはじめとする諸外国との交流親善の促進に寄与すること』とした。ブエノスアイレス市文化大臣のエルナン・ロンバルディ氏、そして1961年にフランシスコ・カナロと共に来日したあのエドゥアルド・アルキンバウ氏も連盟の名誉顧問になってくれた。

この「連盟」の設立に当たっては『タンゴを業として営む利害関係者は団体の長になることは出来ない』という風営法の政令により、教師でない私に設立に関わって欲しいという要請が寄せられた。ラウル・デジャン駐日アルゼンチン大使からも私に在日アルゼンチン人支援の要望があった。そんな経緯でこの団体の設立を「日本アルゼンチン協会」の常務理事ともども手伝うこととなったわけである。

上記の「連盟」の目的からすると、「日本タンゴ・アカデミー」との関係はどうなるのか？という疑問を抱く方もおられよう。現在「連盟」の会員は約120名。その中、約100名がプロのダンス教師で残りはミロンガ主催者や賛助者たちである。従って、プロの業界団体というのが実情であり、世間ではどの業界も自らの事業発展のための団体（協会など）を作っており、タンゴ界もやっとなんか出来たと言えよう。しかし、100万人オーダーの社交ダンス界に比べると、教師の数も踊る人の数も百分の一程度ではなかろうか。アルゼンチンタンゴのさらなる普及のためには、聴く人をもっともっと増大させたいが、ダンスを入り口としてタンゴ音楽の面白さ・深さを知ってくれる人々が増えることも大事なことである。上述のように特にタンゴ・ダンスは音楽を知らないと上手く踊れないという認識の高まりが重要である。最近、ダンス教師で「日本タンゴ・アカデミー」の会員になってくれた人も数名いる。

「日本タンゴ・アカデミー」は、その目的にもあるように『アルゼンチン国立タンゴ・アカデミー他内外に設立される団体とは連携・協調しながらも、独立した組織である。タンゴに関する諸情報を会員に伝達し、その調査・研究の成果を内外に知らせる情報活動、および親睦活動を通じて会員すべての人生の楽しみの一つであるタンゴの振興をはかる』ことが基本である。聴く人を主軸とした「日本タンゴ・アカデミー」と、踊る人を主軸にした「日本アルゼンチンタンゴ連盟」が両輪となって“タンゴ”という車をますます加速し、戦後30年ほど続いたあの“タンゴの輝き”を今日的な立場で復活・発展させていく絶好の機会が訪れているのだ！と考えていきたい。



わたしのひそかに愛するタンゴ

心ならずも La abandoné y no sabía



高場 将美



スペイン語原題は「わたしは彼女を見捨ててしまった、でも知らないでいた……」と、サワリの歌詞をそのまま採ったもの。『心ならずも』という日本語にした人が誰だか知らないが、うまく置き換えたなあ！と感心する。ニュアンスはちがうけれど、言語がちがうから、仕方がない。こんないい題がついたのに、日本ではほとんど知られていない歌のタンゴだ。

(日本題があるのだから、日本でレコードが発売されたはずだ。わたしはタンゴにかかわる仕事をしていながらもかかわらず、というか、そういうお金にならない仕事をしていながら、経済的余裕はなく、ほとんどレコードは持っていない。聴く機会はたくさんあったけれど……。『心ならずも』が、どんなレコードで日本発売されたのか知らない。出たとすれば、ホルヘ・ビダールの、ギター+チェロ伴奏のヴァージョンだったろうと思うが)

わたしとこの曲の出会いは(そんなおおげさなことではないが)、月刊『中南米音楽』につとめていて、なにかの資料で、この原題を見たことだ。——とても気を引かれた。題名に動詞がふたつも入っている。そして「何を知らないでいたのか？」気になりましたね。でもレコードは聴けず、歌詞も入手できないでいた。この題だけが、頭の片隅に残っていた。日本語の題は、まだなかったと思う。

いつのことか忘れたが、あるときブエノスアイレスで、楽譜を買いにいった。在庫をぜんぶ見ただけれど、すでに持っている曲や、ほしくない曲も少しあったから、買ったのはぜんぶで10数点くらいだったと思う。その中に、この曲があった。著作権登録は1944年、わたしの買った楽譜は、1974年7月2日印刷となっている。

ホテルに帰って、すぐにこの曲の歌詞を見た。まず最初のところで、「わあ、こういうの好きだ！」と気に入った。ロマンティックな詩人の魂が感じられる——文学者の詩人ではなく、吟遊詩人。詩作の技法は、ちょっと凝ったもので、でも自然な、リズムの流れがころよい。

「セレナータ」は、日本語ではセレナーデと呼ぶのがふつうだったが、「小夜曲」という訳も定着していた。夜の歌を意味するクラシック音楽のジャンル。といっても、形式ではなく、音楽の雰囲気・イメージをあらわす呼び名だ。スペイン語では(他のヨーロッパ語でもそうかな?)、大事な人(恋人、恋人になってもらいたいひと、友だち、いつもお世話になっている有力者、お金その他の面で助けてもらいたい人、エトセトラ)のバルコニーの下で、夜に、思いを伝える歌を、こう呼んでいる。効果は薄いかもしれないが、昼間でもよろしい。

20世紀初頭のタンゴの環境では、流しのグループの(ダンス用の)演奏もセレナータと称することがあったようだ。この歌詞では、やっぱり本来の意味で、ギターを抱いた歌手のイメージ

が浮かんできますね。

「ファンダンゴ」は、とても古いスペインの民俗舞曲で、今日でも愛好されている。ただし、ラテンアメリカ全域で、600年ほど前から「(教会やまじめな人から見ると) みだらで無秩序な、下層社会のダンス、およびダンス・パーティ」を総称する呼び名になっていた。タンゴの環境で使われるのはめずらしい。ここでは、昔のタンゴ環境なら「ミロンガ」ということばで呼んだものと同じだ。

セレナータもファンダンゴも複数形になっているので、夜ごと夜ごと、そういうパーティがあったことがわかる。

「金銀」は、深い意味はなく、きらびやかで華々しいキャバレーだかパーティだかのイメージを思い浮かばせるためのことば。plata と serenata, sones と bandoneones, fandango と tango が脚韻を踏んでいることで、ごく平凡なことを言っているのに、かっこいい歌詞になっている。声に出して読むだけで、リズムの流れがでてきますね。

Amasado entre oro y plata / de serenatas / y de fandangos; / acunado entre los sones / de bandoneones / nació este tango. / Nació por verme sufrir / en este horrible vivir / donde agoniza mi suerte. / Cuando lo escucho al sonar, / cuando lo salgo a bailar / siento más cerca la muerte. / Y es por eso que esta noche / siento el reproche / del corazón.

(数々のセレナータ、数々のファンダンゴの、金銀まばゆい中で、こねあげられて——バンドネオンたちのさまざまなひびきを子守り歌にして、このタンゴが生まれた。それが生まれたのは、このおそろしい生きざまのなかで、わたしがくるしむのを見とどけるため——そこでは、わたしの運命が命の最期をむかえている。わたしは、このタンゴが鳴るのを聴くとき、このタンゴを踊りにフロアに出るとき、死を、さらに近くに感じる。そういうわけで、今夜、わたしは感じる、心がわたしを責めているのを。)

大きさですね。それが、いいんです。次の部分で、事情が説明される。

La abandoné y no sabía / de que la estaba queriendo / y desde que ella se fue / siento truncada mi fe / que va muriendo, muriendo... // La abandoné y no sabía / que el corazón me engañaba / y hoy que la vengo a buscar / ya no la puedo encontrar... / ¡A dónde iré sin su amor!

(わたしは彼女を見捨ててしまった、でも知らないでいた、わたしがずっと彼女が好きだったことを。そして彼女が去ってから、わたしは信じる心が断ち切られてしまったのを感じる。心は死んでゆく、死んでゆく……。わたしは彼女を見捨ててしまった、でも知らないでいた、心がわたしをだましていたことを。そしていま、わたしは彼女を探しに来て、見つかることができない……。彼女の愛なしに、わたしはどこへ行ったらいいのだろうか！)

(下の楽譜は、第1部の最後と第2部の最初)

Em Am6 B7 Em C7 B7
y es por e-so -----

Em Am6 B7 Em (F)
Sa-ban-do-né y no sa-br-a

第2部の歌詞は、どこにもありそうなものだが、「わたしは彼女を見捨ててしまった、でも知らないでいた」という言い回しが、どこにもなかった独創的なもので、それがあれば、あとは平凡でいいのである。というか、ポピュラー音楽の歌詞は、どこかに生きた新鮮なことがあれば、ほかの部分は平凡で、わかりやすいほうがいいのだ。



この曲を作詞作曲した人は、**ホセ・カネット José Canet (1915-84)** という(左写真)。彼の姓は、ふつう話しことばでは、いいかげんに「カネー」と発音するので、これまでそう書いてきた。でも、このごろ毎日ブエノスアイレスのラジオを聴いているのだが、気楽なおしゃべりのなかでも、人名は、できるかぎり正しく発音しているので、こう書くことにした。あるカタルーニャ語の先生は、こんな場合の表記を「カネッ」としていた。より正しいと思うが、どうも抵抗があるので(わたしの個人的な感じです)……。 「カネッツ」「カネットゥ」という表記もあり得ますね。でも穩当に「カネット」とさせていただきます。

カネットさんは、本業はギタリストである。だから、作曲するのは当然として、作詞のほうも才能ゆたかだ。わたしが、当会のもうひとつの機関誌『タンゲアンド・エン・ハボン』に連載している「タンゴ作詞家列伝」にも登場してもらわないといけないので、この記事では経歴などのご紹介ははぶかせていただく。

彼は、1930年代から、数々の歌手の伴奏をしてきた。この曲は、1943年に、アルゼンチン＝ウルグアイ以外のラテンアメリカ各地でも人気者だった歌手**アルベルト・ゴメス Alberto Gómez (1904-73)** の、チリ国でのツアーに参加していたときに作詞作曲したそうだ。初演者はゴメスということになる。彼の録音があるという情報を見たが、わたしは聴いたことがない。

1944年に、ブエノスアイレスでヒットして、3つの人気楽団が、それぞれにやはり人気の専属歌手に歌わせたレコードが、ほぼ同時に発売された。

その3つは——**ミゲル・カロー楽団／専属歌手ラウル・ベローン Raúl Berón (1920-82)**、**リカルド・タントゥーリ／エンリーケ・カンボス Enrique Campos (1913-70)**、**オスバルド・ブグリエーセ／ロベルト・チャネル Roberto Chanel (1914-72)**。

先に掲載した楽譜は、**ベローン**が歌ったフレージングにしてある(ほかも大差はないけれど)。市販の楽譜は、音の長さなどが整理されていて、おもしろくないし、実際のイメージとは遠くなるので、そうした。もちろん楽譜出版は、表現者が土台に使うように、整理された譜面を提供するものだから、変にこまかいフレージングなんか書いてあったらじゃまになる。譜面は行進曲みたいでも、それをタンゴにするのが表現者の力である。

それから、この曲に限らず、カルロス・ガルデルの時代から、作曲者は多くの場合、楽器を弾くので、演奏してサマになるメロディを作る。歌手は、その曲の特徴である部分はちゃんと生かして、作曲されたとおりに歌うけれど(そうしないと、どの曲も同じになってしまう)、どうでもいいところは、自然に流して歌う。先の楽譜は、歌手のメロディを優先して書いた。

わたしは、この曲の楽譜を買って、日本に帰ってきて、ギターで弾いてみて、メロディがわかっ

た。そのだいぶ後になって、実際の録音を聴いたら、わたしの思っていた音楽とずいぶん違っていたので、びっくりした。まだ楽譜の行間を読むことができなかったんですね。

話は飛ぶけれど、あるとき、そのころ大学生だったアマチュア・タンゴ歌手の高橋正人さん（本業は別として、いまでも機会あるたびに歌っているはず）が、楽団で伴奏してもらえる機会ができたので、簡単な譜面をつくってくれないかと言ってきた。プロに頼んだら莫大なお金を払わなくてはいけないからね。歌のための編曲譜は簡単なほうがいいと知っていたので、編曲なんか書いたこともないわたしは（ずうずうしくも）引き受けた。彼が歌いたかったのは『めぐり逢い **Por la vuelta**』など。そのとき、もしできたら歌ってほしいと、わたしの好きな曲『心ならずも』のバンド譜も書いて渡した。

カロー楽団／ベローン歌のレコードをカセットにコピーしたのを持っていたので（どなたから、いただいたのか忘れてしまいました。すみません）、それを参考にして譜面をつくった。あとで、弾いた人から（学生バンドだったと思う）「高場さん、あのバンドネオン・パートは指が6本ないと弾けないよ」と言われて、大笑いした。輪郭が合っていればいいんだよ。

そんな、いいかげんな譜面によって、正人さんが歌ったのを聴いて（どういうわけか、名古屋でした）、わたしは「いいなあ」と、幸福の絶頂だった。終わったら、誰だったか、やはりアマチュアのミュージシャンが来て「高場さん、いいアレンジですねえ。あの短いヴァイオリン・ソロが入ってくるところなんか、素晴らしいね」と感心された。いいに決まっている！ もともとフランチャーニがヴァイオリンを弾くために書かれた編曲だから、いちばん、ふさわしいところで目立つようにできている（編曲はオスマル・マデルナだろう）。わたしは、ミゲル・カロー楽団をコピーしただけ……と言いたいが、コピーする技術はわたしにはない。構図を盗んだけである。

ラウル・ベローン（右写真。録音当時22歳）の、若くロマンティックで、ダンスホールの軽い雰囲気がいっぱいのが、わたしは大好きだ。

でも、ほかの歌手は、より悲しみの感情が濃い表現をしていて、そのほうが作詞作曲家**カネット**の心情に近いのかもしれない。30代後半は、もう中年にさしかかったと認識されていた時代である。

カネットは、この曲を、**オスカル・アロンソ Oscar Alonso (1912-80)**に歌ってもらうためにつくったという説がある（たぶん、ほんとうだろう）。

アロンソは大歌手なのに（**トロイロ**は、**ガルデール**以後の最高の歌手だと断言した）、人気とはほど遠く、レコードも少ない。『心ならずも』は、数回録音したようだが、わたしは最近、YouTubeで、わたしの推定では1960年代半ばの録音を聴いて、深い悲哀のこもった歌に感動した。ギター伴奏の編曲も演奏も、これまた劇的ですが、おそらく**カネット**自身が弾いていると思われる。

*この曲をYouTubeで聴きたい方は――

- カロー楽団／ベローン歌 <http://youtu.be/T8WkBP27HCA>
- タントゥーリ楽団／カンボス歌 <http://youtu.be/VTEJ05r5c3E>
- プグリエーセ楽団／チャンネル歌 <http://youtu.be/5ECFrlvGQlc>
- アロンソ（ギター伴奏） <http://youtu.be/HJgzkfP63gU>



思い出のタンゴ喫茶巡り (第10回・最終回)

神田神保町 “ミロンガ”

中村尚文・脇田富水彦



神田神保町三省堂裏の路地にある“ミロンガ”、1953年（S28）に開店した。後、随所にタンゴを聴かせる喫茶店ができたが、当店だけは他の店と違い録音テープやLPレコードを決してかけっぱなしにはせず、専任のレコード係がお客のリクエストに応じたり一曲一曲を選曲し聴かせてくれていた。

オーナーの島崎哲夫さんは眼科医師でありながら大変なオーディオマニアで、当時のラジオ技術雑誌に「ウルトラ・リニア・アンプ」なるもの等、技術的な記事を投稿していた。

その島崎さんから店のアンプにガタが来たので新しく作成してくれと仕様と資料を手渡されたとき、学生であった私はとてもビビってしまったが“ミロンガ”のお役にたてればとうれしかった。

作成後、嚴重な特性試験にパス！3～4年ほど使ってもらえたようだ。

神保町と云えば学生の街でもある。学校、学年の隔たり無く共通のタンゴの話題に花を咲かせ毎日楽しく過ごせたこと、50年以上経っても若々しい笑顔の一人ひとり进行を思い出す。実に懐かしい。

話変わって録音機と云えば当時放送局にしか無かったものが、オープンリール式のテープデッキが一般に普及し始めていた。当時はなかなか高価なものだ。レコードプレイヤーの傍にデンと据え付けられ“ミロンガ定期テープコンサート”と銘打った解説入りのコンサートが午前と午後、定刻になると催されるようになった。そのコメンテーターがNTA創立者である初代会長の故大岩祥浩さん、前会長の島崎長次郎さん、故石川浩司さん等であった。皆それを楽しみにしていた。今から思うと日本タンゴ・アカデミーの発祥の原点は“ミロンガ”だと思ふけど思い過ぎか？

当時、このように大いに活用されたテープデッキであるが、難点は1巻に録音された曲がどこにあるのか目では分からないのである。目的の1曲を探すのに他のレコード盤を演奏している間にお客さんに迷惑をかけないようにイヤホーンを使って早送りしたり、戻したりして目的の曲の頭を探すので大変手間のかかる仕事であった。だから専任のレコード係が必要だったのであろう。私の知る限りでは1代目がフミヨさん、続く2代目のレコード係が追栄愛子さん（通称アイチャン）である。ある日、例によってアイチャンがテープデッ

キを操作していた。私が小用に立つため席を離れたとき、「ちょっと、待ってヨ！」と彼女に呼び止められた。側にいたオーナーの奥さんであるセン子さんが「マァ！愛子さんったら」と苦笑しながら私に詫げるのであった。それほどテープから1曲を頭出しするのは大変な作業なのである。

流れたのは1927年録音のカナロのソロ・グリスであった。3分少々演奏をこんなに長く感じたことはなかった。今でもこの曲を聴くと“ミロンガ”のその時を思い出す。

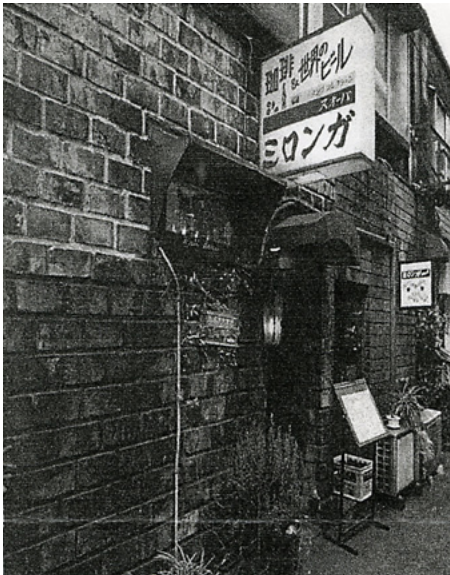
これらは学生時代のことだ。その後、早川真平・藤沢嵐子夫妻を始めとする数多くの演奏家たち、また、オスバルド・プグリエーセ等来日アルティスタが来店した。なかでも1971年には、あのロシータ・キログが大岩祥浩さんと共に来店したのは話題になった。このように由緒ある“ミロンガ”だが、1995年にオーナーが代わり“ミロンガ・ヌオーバ”と改名、あのテープデッキも撤去されて運営法も他店と同じように1枚のLPが終了すれば、手の空いている店員さんが次のLPを掛けるという具合になってしまった。

(この項 脇田)



左から故・大岩祥浩氏、一人置いて故・加年松城至氏、ロシータ・キログ

「ミロンガ・ヌオーバ」



昨年（2013年）タンゴ喫茶「ミロンガ」は開業60周年を迎えて、やや控えめに祝った。思えば50数年前の学生時代には毎日のように通い、一日2回以上顔を出すことも珍しくはなかった。他にも新宿「まりも」、高田馬場「ボカ」、池袋「らん」などでも常連客として名前を知られた。そんなタンゴ熱中時代は1965年O.プグリエーセの第1回来日公演を機に終焉を迎えた。それから40年以上が過ぎた2006年頃、再び「ミロンガ」に顔を出すようになった。店名も「ミロンガ・ヌオーバ」となっていた。聞くところによると代替わりした1995年からこの名が付くようになった由。店内は昔の雰囲気が残っているもののテーブルや椅子のセッティングはまるで異なり、週に2、3回通う

なっている。客の中には、時々遣って来るタンゴ歌手で惜しくも2年前に亡くなられた昌木悠子さん、バンドネオンの小川紀美代さん、経済評論家の佐高信氏がいた。

ところでタンゴから離れていた私が再び「ミロンガ」に通うことになったキッカケはというとほんの些細な事件からだ。関西から東京に戻り市川の行徳に仮住まいを構えて数年過ぎた頃か近くを自転車で散策していると「Mi refugio」という店の名が目にとまった。興味半分で店に入ると客は近くに住む南米人たちの溜まり場になっていた。店主とおぼしき人（コロンビア人）に“良い店名ですね”と声をかけると“意味が解るのか”と問われ、二言三言やりとりをしていると、客の中の一人が私に話しかけて来た。タンゴやフォルクローレが好きなら、家からマテ茶を持って来るから飲みながら話をしようという。彼は35歳くらいのアルゼンチン人で、いきなり“ピアソラを知っているか”との問いに“勿論知っている”と答えたら矢継ぎ早に“ピアソラのどんな曲を知っているか”と来た。私のタンゴの知識は1965年で途絶えている。「パラ・ルシールセ」「プレパーレンセ」「トウリウンファル」「ロ・ケ・ベンドゥラー」と答え最後に「アディオス・ノニーノ」を加えた。彼は、一瞬不可解そうに「アディオス・ノニーノ」は納得したもの他の曲は彼の頭の中には無かったようで彼の口からは1964年以降の名曲（当時の私は知らない曲ばかりだった）がずらりと並んだ。これがピアソラの名曲だと言わんばかりに、彼は私の目に強い視線を送って来た。“嗚呼タンゴの世界も変わったんだなあ。どんな風に変ったのか確かめよう。そして40年間の空白を少し埋めて見よう。さあ、「ミロンガ」へ”となった次第。再び「ミロンガ」に通い出した頃の店のスタッフは役者揃いでしたね。店長のかよさん、じゅん子さん（現 四谷「ミ・レフーヒオ」のオーナー）、ミチヨさん（『神保町 タンゴ喫茶劇場《新宿書房刊》』の著者）、あやのさん（シャンソンを唄う浅草老舗泥鰌屋の娘さん）、アリス（スイス人でスイスに帰った時スイスのタンゴシーンの写真を沢山撮って来た）、藤森君（当時学生でバイト中）と多彩だった。「ミロンガ」に通うたびにタンゴ仲間が増え、タンゴ喫茶として開業50年も過ぎて未だライブをやったことがない、、、。“これはいけない。タンゴライブを一度やろうよ”とスタッフ共々盛り上がり、私がプロデュースすることになった。やるたびに盛り上がり都合3回ライブを行った。出演頂いたのは歌手 昌木悠子、Bn 岡本昭、Bn 北村聡、Vn 家野洋一、Pf 須藤信一郎、Pf 中山育美といったところ。さらに今年の9月20日（土）には明大OB会発足20周年ということで「ミロンガ」を17：30～21：00まで貸し切り。第1部タンゴで平田耕治と青木菜穂子のデュオ。第2部タンゴの弾き語りをKaZZma。第3部フォルクローレのソッコ・マージュという多彩な顔触れと一般客の協力も得てOB会二次会も無事終了した。

現在の「ミロンガ・ヌオーバ」は大きいテーブルに集まっていたタンゴ仲間が一人抜け二人抜けて、一般客に占領されている始末で淋しい限りなのだが、客の入りは上々でタンゴ喫茶「ミロンガ・ヌオーバ」はまだまだ繁盛を続けることだろう。

（この項 中村）

私の愛聴盤 ～第6回～



私の愛聴盤に加えて

加藤 光夫 (小樽市)



ファビオ・ハーゲルと筆者 2001年1月21日

本誌'05年秋号に「私の愛聴盤」として一文を寄稿してからほぼ10年。相変わらず聴くだけの楽しみ、仲間と愛好会の月例コンサートを続けて来た。それほどの枚数でも無いがふっと身の周りに「断捨離」の言葉がちらつく。手元のLP・CDは、ひとりで聴くだけでなく聴いてみたいとか、首を長くして入手した時の喜びなどが大きいし、推薦したのが喜ばれることもある。

故大岩祥浩氏からAMPの一枚「カナロ1930年代第3集」のコメント依頼を戴いたのは1990年。これが第1号だった。未知の曲が冒頭からあって「ボルケ・セラー」「ナビダー」「ティポ・ロコ」といった曲にびっくりし、テーマの「ラ・ウルティマ・コーパ」「メンティーラ」「マドレセルバ」にほっとした。SP原盤がカセットに入れられ手元に。10枚と少しCD化も含めてまとめて来た。メモリアル・シリーズにデ・カロとパチョが届き、仕上げた時に氏の病床から“少し遅れるかもしれない、、”との便り。幻のCDになってしまった。(ラ・ウルティマ・コーパ TC-1071)

クラシック系のバンドネオン奏者アレハンドロ・バルレッタの25cm LP 3枚のうち1枚のジャケットが右の写真でバッハ、ブクステフーデ、スカルラッティ等が入っている。少し前にNHKの第1放送で小松亮太氏がインタビューの中でバルレッタのことを話していたことがある。入手は“すすきの”にあった古レコード店だった。(SMC-549)



「中南米音楽」社の故中西義郎氏は筆者の労音時代からライブなどの際に企画面でお会いした。サッソーネやプグリエーセ楽団初招聘の頃だった。同社のオリジナルの企画で5枚、'87年「タンゴの淑女たち」「ラ・クンパルシータ集」(24曲)などのCDでの関わりが懐かしい。後者は邦盤第1号、プレスが少なかったのか会員も知らなかった。今や稀覯盤か。(「ラ・クンパ

ルシータ」 キングK32Y-4045)

同社のCDシリーズでは「オスバルド・プグリエーセVol. 1- 2」は51年から58年のVol. 2には快演も多く、会員にも薦めた。初来日の初演の東京では多くの愛好会諸兄にお会いした。(「オスバルド・プグリエーセSDL-2014」)

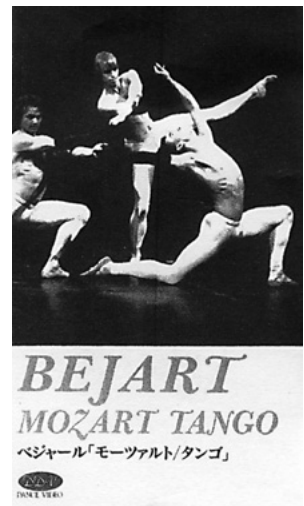
ラジオ放送の定時番組は竹村淳氏が軽やかな話しぶり、時々ハガキで激励？していた。「タンゴの中で この1曲」というのをやるので北の方からとのこと。プグリエーセの「ZUM」とした。ピアソラとの「YUMBA」(92年 Lucho 盤“Finally together” 7705-2)でも良かった。ところで民音の45回のうち最近の10回はダンスのコンクールのようにアクロバットめいた踊りに少々不満。と言っても会場は入りも良いと言うことで一言も無いのだが。ポピュラーなCD がディスク・ショップに見当たらない今日、民音制作 2 枚組40曲来日楽団集が気軽に入手出来、ファン層が広がると良いのだが。

モーリス・ベジャールの「モーツァルト・タンゴ」はふらりと入った札幌タワーレコードで発見した。仕事でパリの2泊プチホテルの枕元のテレビで見たので懐かしの再会。ゲテ物？ベジャールなのだから。

オットー・ピット氏 (Otto Witt 1912 ~ 1992) (バンドネオン奏者、元アルフレッド・ハウゼ楽団在籍、来日時札幌在住の女性伸子さんと結婚、創立40周年記念HBC 放送で南安雄指揮札幌交響楽団での演奏会の実施、10年間の日本生活後死去。当会の参加もあった会員のひとり)

氏から頂いたカセットに Original Bandonion Orchester Neustadt / Coburg Leitung. H. Renner とあり、15人のバンドネオン奏者たちが「カミニート」「アディオス・パンパ・ミーア」などを奏する。

朝日カルチャーセンターのタンゴを聴く講座は、2005年から2013年まで85回を昨年で終えた。月例に加えてこれからタンゴをじっくり楽しみたいという人たちが20人ほど受講された。途中で受講者も入れ替わったが、良い経験だった。いろいろクエスチョンも頂き、宿題を持ち帰ることも多かった。死蔵している盤を探したり、CD をレンタルしたりで、もっと聴きたいという方が当月例に加わった。いつもタンゴに親しみたいという方々にまぎれもなくカナロからピアソラまでを紹介し交流を続けることが出来た。当会も間も無く600回の月例になる。ごきげんよう さようなら？



タンゴこぼれ話……その2

…ロシアでは「エル・チョコロ」が私たちの国歌であった…

El choclo fue nuestro himno en Rusia

著: Héctor Ángel Benedetti
訳: 弓田 綾子



1916年、ブエノス・アイレスの「Noticias Gráficas」誌のコラム欄に、ビジョルドの作曲した「エル・チョコロ」がロシアではアルゼンチンの国歌として演奏されたとの記事が載っていた。しかし、当時ビジョルドはまだ多くの人たちに、それほど名を知られてはいなかった。

そんな彼の作曲した「エル・チョコロ」が何故遠く離れたロシアで演奏されたのか不思議に思った。

記事は“アレザンドラノワ（ロシアの地名）”で従軍記者をしていた当時32歳のティト・リビオ・フォッパから送られてきたものだった。

彼は有名なジャーナリストであり作家でもあった。また、外国にいる時には領事館員としても活躍していた。私はフォッパから直接当時の真相を聞こうとして、やっとの思いで彼と会うことが出来た。

フォッパは懐かしそうに宙を見つめながら、次のようなことを静かに語り始めた。

それは、フォッパがジャーナリストとして他国の記者たちと一緒に空軍基地での兵士たち取材したときのことである。空軍基地は辺り一面雪におおわれた丘の上にあった。兵士たちとは取材を通じ親しくなり、よくお互いに心の内を語り合ったものだ。

或る日、彼らの寮で食事の招待を受けた。そこは軍服姿の兵士たちが忙しそうに行き交っていた。そして、ミーティングルームの片隅に1台のピアノがポツンと置かれていた。殺伐としたこんな所にも音楽は不可欠であったのだろう。そう、音楽はいつの時にも……。

食後兵士たちと近くのバーへ行き、酌み交わす酒に祖国を思い至福のひとつを共に過ごした。そんな時、一人の兵士がバーのピアニストに、各国記者たちの母国の讃歌・国歌を弾くように指示した。するとピアニストはまず最初にドイツの国歌をおもむろに弾いた。

次にスイスの記者に目をやり、彼の母国スイスの国歌を静かに弾き始めた。外は白一色の銀世界。ピアノの音色と一緒にいた兵士たちは、心から酔い、平和をひたすら願いつつ静かに耳を傾けていた。

そんな最中、スペイン語を話せる兵士がそっと私に近づき「ピアニストはあなたの国の曲はあまり知らないようだ。でも、アルゼンチンの有名な曲を弾いてくれるそうです。その曲をあなたの国の国歌として聴いて下さい」と、申し訳なさそうに小声で言った。

私はどんな曲を弾いてくれるのかと、胸ときめかせながらその時を待った。皆も同じように早く次の曲が聴きたく、今か今かと首を長くして待っていた。やがてピアニストは私に小さく右手を振りながら、あの「エル・チョクロ」を指先が鍵盤の上を舞うように弾き始めた。当時、まだ無名に近かった作曲家ビジョルドの曲を、異国の“ロシア”で聴けるとは夢にも思っていなかった私は、流れ来るメロディーに母国を思い出し、感動で胸が一杯になった。

ピアニストは弾き終わると「このエル・チョクロは、アルゼンチン記者のティト・リビオ・フォッパに捧げました」と、慈愛を込めて言ってくれた。鳴り止まぬ拍手にアルゼンチン人として、大きな誇りを感じた。きっと他の記者たちにも、この感動は心に響き渡ったことだろう。1916年2月、32歳のことであった。そして、このことは私にとって一生忘れられない強い思い出となったのである。フォッパは語り終わるとニコリと笑みを浮かべ“Café con leche”をおいしそうに飲んだ。

これらのことを従軍記者ティト・リビオ・フォッパから聞いたとき、私自身改めてTANGOの心を惹きつける魅力を感じることが出来た。従軍記者として活躍したフォッパは、1960年静かに76歳の生涯を閉じた。

(2011年12月4日「タンゴ心酔クラブ」プログラムより転載)

会員アンケートのお願い

私の好きな“Chiqué” 3曲アンケートにどんどんご応募ください。
3曲でなくても結構です。皆さま奮ってご参加下さい。

(I) 応募の方法

- ①メール：hdomingo@bc4.so-net.ne.jp
件名を“アンケート”と明記して下さい。
- ②郵送：Tangolandia 誌裏表紙記載の住所に大澤 寛宛で、封筒に“アンケート”と明記してお送り下さい。なおFAXでの受け付けはいたしませんのでご注意ください。

(II) 記入の仕方

- ①お名前およびお住まいの都市名
- ②まずお好きな順に演奏者・楽団名・出典(録音時期等)をお書き下さい。
- ③3曲それぞれにまつわる思い出・エピソードなどを1曲について文字数300字見当でお願いします。あくまで目安です。

(編集部)

私の思い出の アーティストたち

弓田 綾子

Para la Señal
AYAKO
Con todo aprecio

[Handwritten signature]

ALFREDO
DE ANGELIS



アルフレド・デ・アンジェリス



フアン・ダリエンソ

A la señoita Ayako
Kawamori con gran estima

[Handwritten signature]

Para la
Señal AYAKO
amablemente
Rodolfo Diaz
39-6-62



ロドルフォ・ピアジ

カンパラーチェ逍遥 (1)

新宿の中古店から 古道具屋行脚スタート

島崎 長次郎



はじめに

戦前にわが国に紹介されたタンゴのレコードは、ヨーロッパ録音を含めておよそ200種くらいになるだろう。その中でダントツなのがコロムビア盤のフランシスコ・カナロでおよそ50種類、他にビクター盤のフランシスコ・ロムートやエドガルド・ドナート、オスバルド・フレセド、それに注目のファン・ダリエンソなどの楽団が続いた。

戦後しばらくの間、各レコード会社はそうした戦前盤の焼き直しを市場に送り、ファンの渴望に辛うじて応える状況が続いた。発売元のレコード会社はドイツ系のポリドールやテレフンケンも僅かにあったが、そのほとんどは、アルゼンチンにおけるオデオンとビクターの2社による寡占体制をそのままに、コロムビアとビクターによってわが国のタンゴ・レコードは占められていた。

ファン待望の戦後の新録音がリリースされはじめたのが昭和20年代の後半で、昭和27年頃、大阪の(株)日音(代表:野崎浩一)から“クリスマール・レーベル”がまず登場、

新顔のクリストバル・エレロ (Bn) やTK原盤のアニバル・トロイロ楽団などのフレッシュなスタイルとサウンドが注目を集めた。そしてこれを追うようにしてマーキュリーが新興のミュージック・ホール原盤によるカルロス・ディ・サルリを矢継ぎ早に (SP19枚) リリースすると、ファンのタンゴ熱は急激に上昇してきた。加えて、さらにこれを決定づけたのが昭和30年、東芝音楽工業がオデオン原盤との契約に成功してエンジェル・レコードを本格的にスタートさせたことだった。老舗のコロムビア、ビクター共々にこれを迎え撃つ感じで、ここから熾烈な販売合戦が展開され、タンゴは一気に戦後の絢爛としたレコードの新時代を迎えるにいたった。

懐かしい新宿の中古レコード店

そんな混沌とした昭和20年代の後半から30年代にかけ、賑わっていたのが新宿の西口にあった2軒の中古レコード店だった。青梅街道を背にした小さい方の店が「オザワ」で、

その街道を前にし、SPをメインにした大きな店が「トガワ」だった。いずれも客層は学生や若い会社員が多く、毎日のように足を運ぶ者もいてなかなかの盛況だった。当時の私の下宿が京王線の初台駅の近くで、新宿は乗換駅の関係もあってしばしばこの2店には顔をだした。いうまでもなく中古レコード店探訪の喜びは“掘り出し物を見つける”楽しみと、中古であるがゆえに比較的“割安”ということである。値段の面で言うとその頃の新譜（SP＝表裏2曲）が350円なのに対し、国内盤で大体150～300円くらいで、時々見かける貴重な外盤のオデオンなどは、ほぼ500円～600円といった感じだった。今の感覚でいうと一見たいした価格ではないと思うのですが、当時の日雇い労働に対する代価で「ニコヨン（240円）」なる言葉が流行ったように、これは相当な価格だったといえよう。学生のアルバイト料も時給で20円～30円の時代だから、レコードは今に比べてまだまだ“高嶺の花”という過去の贅沢品のレッテルが陰のようにつきまとっていたのだ。

「トガワ」では、OTVの「ビクトロレーラ（JA-1219）」やロムートの「ブエノス・アイレス（J-2521）」、カナロは「巴里の思い出（JA-45）」などを買った記憶がある。ここでは痛恨の思いをしたことが一度だけある。まだ学生だったから、昭和30年頃のことだと思う。フツと立ち寄っていつものようにケースにぎっしりと詰まったSPをめくっていたところ、マヌエル・ピサロの「ミ・ドロール」と「レクエルド（J-1913）」という黄金のカップルの1枚が出てきたのだ。どきっとして引き出したまではよいものの、値段は、と見ると250円とある。ところが、バイト帰りで懐には50円しかない。さてどうしたものかと考え、とっさに思いついたのが、明日来ることにして、少し離れたところにある浪花節のケースの一番奥のところに入れておくことだった。こうしておけばまず心配はないだろうと。そして翌日の夕刻にはやる心をおさえ、工面した250円をポケットに店に入り、一直線に浪花節のコーナーに向かい、一番奥のところをめくってみたものの、ない。たしかにここだった



たと周辺をめくってみたがないのだ。さてよ、だれかがタンゴのコーナーに戻したかと、そこも探したがどこにも見当たらない。これには本当にガックリとしてしまった。爾来、“中古品は見つけた瞬間が勝負どき”を肝に銘じ、即座に決断・対処することを学んだ。

一方の「オザワ」は規模も小さく、SPよりそのころ注目されてきたLP、とくに外盤の珍しいものがときどき入荷するので目が離せなかった。ここでは「エル・レフラン」をはじめ「パラ・ドス」「N…N…」「マーラ・フンタ」など、プグリエーセ最新の名演が収

められた当時話題沸騰のデッカ盤「Argentine Nights」を入手したのが強い印象になっている。まだ東芝がオデオンとの契約を結ぶ以前だったので、これは貴重この上もない掘り出し物だったからだ。急ぎ足で帰宅し、電蓄の前に正座して繰り返し聴きながら、タンゴの新時代到来を心躍る思いで噛み締めたものだ。この「オザワ」で思い出すのが、<中村

とうよう>さんとの出会いだ。京都から上京して銀行勤務をしていた頃だから昭和34～5年の頃のことだろう。ある日私が手持ちの戦前の6枚組みの「中南米アルバム」を、他に欲しいものがあるって売りに行ったところ、その交渉を脇で聞いていたのであろう、そっと私の袖を引き、“そちらの言い値で私に頒けてくれませんか”という人がいるのだ。それがとうよう>さんだった。以降、突然に亡くなる3年前までなにかと交流があった。彼がその後ラテンを中心に幅広い音楽評論の世界で精力的に活躍したのはご存知のとおりで、昭和40（1965）年の大岩、中島、島崎の共著になる『タンゴ入門』（音楽の友社）の出版も、彼とのそんな出会いがきっかけで実現されるに至った、と改めて今、深く感謝している。

カンバラーチェ（古道具屋）行脚を始める

その頃の中古のレコード店に通っていて思ったのは、そもそも店にはどんなルートでレコードは入ってくるのだろうか、ということだった。そんな折に当時親しくさせて頂いていた人“タンゴ床屋”で有名な寺田太作先輩がいて、あるときその紹介で、住まいの近くのジャズ・レコードのコレクターにお目にかかる機会があった。お宅に伺ってびっくりしたのは、応接間に隣接して堅牢なドアの向こうに立派なレコード室



を持っていることだったが、さらに驚嘆したのは、そのSPのすべては長年かけて中央線沿線をメインに都内の古道具屋を行脚して集めたのだ、というのだ。おそらく6～7千枚はあったろう。これには恐れ入った。しかも憎いのはジャズばかりか、タンゴもホセ・ポールやロス・プロビンシアーノスなどの垂涎の名盤を所蔵していてチラチラみせるのだから参ってしまう（これら数枚は、後に私の見つけた年代物のジャズと交換して入手することができたが…）。そしていわく、本当によいものを集めたいなら、中古レコード店に行く前の段階、つまり古道具屋に入荷したところを押さえなければダメだ、とのこと。そのためには労を惜しまず、汗水を流すことだ、というのだ。できれば古物商の鑑札をとって、ここぞというところへ買い出しに行くくらいの根性がなければ本当によいものは集まらない、とまで言われて恐れ入ったのを覚えている。

そんな刺激を受けて古道具屋への関心が高まり、以降はレコード探索の方向を変え、まず住んでいる街の周辺から、カンバラーチェ行脚を始めた。ついでながら、そのジャズのコレクターは西島さんと言い、のちに道楽が嵩じ神田の神保町に“トニー”なる中古のレコード店をだし、いまでも盛業中だ。ご本人は惜しくも数年前に急逝されてしまったが、面白いのは別名で「紅井良男」と名乗っていた。なんのことはない、これはご本人がお好きだったジャズ・クラリネットの名手ベニー・グッドマンの、まさに日本語表記そのものだった。

初訪問の古道具屋は、京王線の初台駅から程近い不動通り商店街だった。いまは「オペラ・シティ」が出来たりして、周辺もすっかり変わったが、今から50年ほど前はのんびりとした商店街で、その裏の住宅街では、夜ともなれば虫のすだく音が聞こえるほどだった。

そんなある日、散歩がてらに1軒の古道具屋が目に入ったので覗くと、片隅の台の上に数枚のレコードが見えた。ハッとしてみくって見たらロベルト・フィルポの「ラ・カルカハーダ（大笑い）(J-2660)」とあるではないか。しかもピカピカの美麗盤だ。かねて欲しいと思っていた盤だけに顔が緩むのがわかった。そしてもう1枚よくわからないが、とても気になるものがあった。見るとフィルポと同じコロムビア盤で、当時は見慣れない楽団のヘナロの「ヤスミーナ／YASMINA」と「何時だか言って頂戴／DECIME CUÁNDO (J-2611)」とある。どうしようか一瞬ためらったが、とにかく求めることにし値段を訊くと、1枚50円でよいというのだ。これには嬉しくなってしまう、自宅にとって返し早速まずフィルポをターン・テーブルに乗せて耳を傾けた。スクラッチ・ノイズはほとんど聞こえないというのも凄いいし、フィルポ特有の弦セクションの流麗さに打たれた。しかもたったの50円だ。古道具屋歩き喜びを初めて知った記念すべき日だった。そしてもう一枚の正体のよくわからないヘナロを聴いたら、これがまた哀愁とロマンに溢れ、実に心打つ演奏なものには興奮してしまった。早速その晩、乏しい資料を調べたところ、出版間もなかった高山正彦著『タンゴ』（1954年、新興楽譜出版）の中にその名前を発見、初期のバンドネオン奏者で俗称“ターノ”ことヘナロ・エスポシトといい、その後マヌエル・ピサロなどと共にヨーロッパで大活躍した人物と判明、よい買い物をしたと改めて感激したものだった。その後ヘナロの演奏はCDを含めいろいろと聴けるようになったが、つまるところ日本発売のこの2曲以上の演奏には、ついぞ今まで出会えないというのが私の率直な感想である。



“いや、古道具屋行脚は実に楽しい。病み付きになりそう”とこのとき強く思った。

なお、ヘナロについては、先頃のTanguendo en Japón 34号に、齋藤富士郎編集長が詳細な記事を掲載しているので、是非ご一読をお勧めしたい。

(つづく)

大橋英夫さんを悼む

佐藤 光男(横浜市)

7月8日、大橋英夫さんが亡くなった。心よりお悔やみ申し上げます。ここ5年ほど病んでおられた。8年前には奥さんを亡くされている。奥さんも暫く闘病生活をされていた。ここ10年余り、ご心労ご苦労が続いたことになる。こうした経過を振り返ると悲しみもさらに増しする。それでいて普段本当に明るく振る舞われていた。

大橋さんとは横浜ポルテナ音楽同好会(横ポル)で初めてご一緒した。二人とも創立当初からの会員だから来年で30年のお付き合いということになるところだった。発足から程ないころ、レコードを探しに夕方の恵比寿に立ち寄ったことがある。そこで大橋さんにばったりお会いした。スーツがピシリと決り、手にするバッグは品がいい。素敵なビジネスマン姿は強く私の印象に残っている。

会では早くからワープロを駆使され、会報やプログラムをお作りになっていた。横ポルは会報を大事にしてきた。当初の、100人近い会員はほとんどが仕事を持っていた。会員相互の間のコミュニケーション、好きな音楽を語ること、外部の動向、ニュースを知ることは現在よりもはるかに重要だった。大橋さんは、会報を豊かなものに作り上げた功労者のお一人である。また早くからプログラムづくりのメンバーであり、その責任者も務められた。更には会長役を何度かお引き受けになった。

大橋さんと好みの音楽を知るいい企画があった。1997年11月、大橋さん、泉谷隆男さん、杉山滋一さんの三人はそろって還暦を迎えた。題して『タンゴとの60年』、10年ごとに自分を語り、曲目を取り上げる。大橋さんの7曲を見てみよう。①('37年、以下年は省く)お父上の邦楽から洋楽までのコレクションの中の1曲。幼少時、聞き覚えた。「Poema」(カナロ)② 戦災の跡も片づき、よく母上と映画に出かけた。「別れのタンゴ」(高峰三枝子)③ 大学でラテン・アメリカ音楽研究会。階段教室でレココンを開く。「Cicatrices」(トリオ・ロス・パンチョス)④ 長男誕生、ひそかに深夜のFM放送を聞く。「El esquinazo」(ピリンチョ)⑤ 組合との折衝に明け暮れる。すいよう会のメンバーだった同僚とのタンゴ談義が潤いだった。「Adiós Argentina」(カナロ)⑥ 横ポルに入会、タンゴの深みにはまる。通勤の往復にもタンゴを持ち込んだ。「Fumando espero」(キログ)⑦ 家族との海外旅行にもタンゴを携える。「Mentira」(カナロ/チャルロ)となっている。お好きだった曲が勢ぞろいである。どちらかと云うと曲が主で、楽団、歌手は従だった



かもしれない。この頃、カナロに凝っていた様子も伺える。

2002年、前年に経済危機に陥ったアルゼンチンに、横ボルとしては2度目となる旅行を実施した。この時、大橋さんは奥さんが病床に伏しておられ参加できなかった。とても残念だったはずだが、明るい顔で私たちを見送ってくれ、饒別までも頂戴したのである。チーム一同、一夜豪華な宴を持つことができたのである。2007年になると3度目を実施しようということになった。計画はかなり具体的なところまで進んだのであるが、最後で息が合わずともいうのか、沙汰止みになってしまった。ここでも大橋さんはまたもや残念な思いをする。

大橋さんと私は急遽、旅行社の主催するツアーに参加した。主にタンゴを目的とする旅には違いないが、より一般的である。準備不足もあって、ショウを楽しむ時間は相対的に少なくならざるを得ない。しかしその分、街歩きやレコード、資料探しをすることで、これもまた楽しい旅となった。

ツアーで、松阪の上田さんにお会いした。東京、横浜の会で存じ上げていた。ご主人とご一緒だった。上田さんは毎晩、プグリーエセのバンドネオン奏者だったアレハンドロ・プレビニャーノを追いかける。東京、群馬、長野から参加の、それぞれ一人旅の若い女性のお目当ては深夜にまでおよぶダンスである。ミロンガからタクシーで戻るのはいつも3時過ぎだという。大橋さんがいつからタンゴダンスを始めたか知らないが、多分この時の熱心な会話が開眼した一因ではないかと思う。一日、隣国ウルグアイの文化遺産コロニア・デル・サクラメントを訪れた。近いところだが一応船旅である。古い石造りの家々、木々と建物が綾をなす箱庭のような街並み、これらが入り江を縁取っている。一幅の絵である。大橋さんはいつまでも立ち去りがたく眺めていた。この遠足には大阪の中学の先生氏が一緒だった。この御仁、タンゴにはほとんど興味がない。この街では別行動だったが、帰りはすっかり別人になってしまう。大虎に変身していたのである。二人はほとんど困憊したのだが、御仁を何とかなだめ、無事通関を経てほぼ定刻に出航できたのは大橋さんのおかげである。

この旅では本当に大橋さんのお世話になった。体力がないうえに、夏引いた風邪がしつこく抜けない。街歩きも充分にご一緒できない。資料を集めるつもりで出かけたのだが、情けないことに歩き回る力がない。大橋さんにメモでお願いした。「あったよ」と言って買ってきてくれた時は実にうれしかった。方々歩いてのことだったし、本はずっしりと重かった。お世話になったのは勿論この件に限ったことではなかった。

帰路、夕方エセイサ空港を飛び立った飛行機は薄雲を抜け、視界が開けた。空は暗くなりつつあった。突然大橋さんが叫んだ。「あっ、月が逆さになっている」。そう、ここは南半球である。細い銀の糸のような新月が、普段見るのとは左右反対の美しい姿を見せていた。眺める大橋さんの顔は至極満足げだった。

もう三途の川は無事越えたかな。大橋さん、安らかにお眠りください。

追悼

ビルヒニア・ルーケ

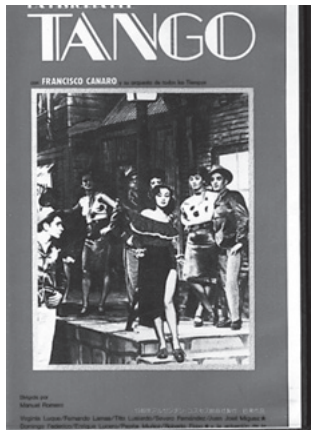
海部 英一郎 (藤沢市)

母と娘の2役で

2014年6月3日、アルゼンチンの女優であり、歌手であるビルヒニア・ルーケ (Virginia Luque) が亡くなりました。私がビルヒニア・ルーケの名を知ったのは1949年アルゼンチン・コスモス映画社制作の映画「タンゴの歴史 (La Historia del Tango)」で主役の母と娘の2役を演じている彼女の姿でした。この映画は監督マヌエル・ロメロ、脚本エンリケ・カディカモとフランシスコ・ガルシア・ヒメネスで、未だアルゼンチンの情報の希薄だった当時、1960-70年代、色々な所で



歌姫アウローラ・ベガに扮した
ビルヒニア・ルーケ



「タンゴの歴史」のDVDの
ティタ・メレロ

見せて頂き、
喜びました。
ごく簡単にこ
の映画の筋を記します。

ビルヒニア・ルーケ扮する場末のカフェの歌姫アウローラ・ベガ。彼女に思いを寄せるのが作曲家・ギタリストのアンヘル・ビジャルバ (アンヘル・ビジョルドをもじった? 演: ルシアルド・セベロ)。ふたりの仲を割くのが金持ちの息子で遊び人のファン・カルロス (演: フェルナンド・ラマス)。傷心のアンヘルはパリへ移住。結婚して男の子が生まれる



写真は左が娘のロシータ、右が母親アウローラ
双方ともにビルヒニア・ルーケが演じている

が妻を亡くし、その男の子を連れて帰国する。一方でアウローラは、ファン・カルロスに捨てられ、彼との間に残された女の子を懸命に育てる。この女の子とアンヘルの男の子が同じ小学校に入り後に恋仲となる。女の子は歌手になり、フランシスコ・カナロ (実名でこの映画に出演) 主催のショウに出演する。これを落魄の父親フ

アン・カルロスが秘かに観に来る。そしてアンヘルの仲立ちでアウローラと再会するというものです。

ただ白状しますと私はビルヒニアより巻末のカナロのショウで酒場の戸を押してパッと現れ「エル・チョコクロ」を歌うティタ・メレロ（2002年98歳で死去）に惹かれており、1994年の訪亜時には（当時は未だCDはなく）ティタのテープをモンテ・ビデオで見つけて万歳をした覚えがあります。

金看板ビルヒニア・ルーケ



前1990年代1、2回エル・ビエホ・アルマセンを訪れていますが、残念ながら記録を残していません。多分ビルヒニアが出ていなかったからだと思います。

【2006年2～3月】湘南アルゼンチンタンゴダンス同好会創立15周年を記念し、リオ・デ・ジャネイロのカーニバルを観て、サンバを踊り、ア

右の写真は（上）：エル・ビエホ・アルマセンで歌うビルヒニア・ルーケ（下）：フィナーレで並み居るダンサーを従えて挨拶するビルヒニア

【2000年7月】棚田晃吉・典子先生（ダンス教師）が企画したツアーに参加、7月22日エル・ビエホ・アルマセンに連れて行って貰いました。この時はバンドネオンをフリアン・プラサが弾いており、踊りはディエゴとアンドレア、マリアベレンとサンティアゴ、ビビアーナとガブリエルの3組でしたが、最高に印象に残ったのはビルヒニア・ルーケの歌で“ウノ”をしみじみ歌ってくれました。この

左の写真（上）：2000年棚田ツアーで、舞台が終わって2階に上がってきたビルヒニアを囲んで（中）：この時のフィナーレ、向かって左から4人目がフリアン・プラサ、その左にビルヒニア・ルーケ（下）：エル・ビエホ・アルマセンの入り口に掲げられる出演者看板、こうしたサービスは他所では余り見られない



ルゼンチンではマル・デル・プラタで海水浴をし、ブエノスアイレスのミロンガで踊り、レッスンを受ける旅をやりました。

この年のエル・ビエホ・アルマセンは専属楽団の他、来日したばかりのオスバルド・ベリンジェリ楽団が出ており、踊りはセステートとマルセ、ニコルナウトルイス・ペレイラ、アンヘルとアンヘレス・マリーナ、ロレーナとアレシオ・ナルマスで、歌はバンドネオンを弾きながら歌うカルロス・モレルと金看板ビルヒニア・ルーケでした。ビルヒニアはこの時多分79歳と思いますが、全く衰えぬ声量の歌を聴かせてくれました。食事付200ペソでした。

【2008年2月～3月】この年は自然に出来た南米旅行の仲間たちとペルー、チリ、アルゼンチン—3か国の旅をやりました。ペルーではマチュピチュ、さらにティティカカ湖を回り、チリでも観光を楽しみ、それぞれの国の踊り場でタンゴを踊りました。ブエノスアイレスに入ったのが2月22日、「ビルヒニア・ルーケは高齢だからもうショウには出ていない」と云われ諦めていましたが、26日たまたま親しいガイドの菊池マリアさんに電話した所「今日から3日間彼女が出演します」と云われ「それっ」と席を取って貰いました。当日申込みだから席は1階の階段下、ショウの内容は一昨年とあまり変わらず、相変わらずビルヒニアの歌が光っていました。翌日帰国する女性達によいお土産が出来ました。この年は送り迎え、食事付で80米ドルでした。この後マリアさんから、私がブエノスアイレスにいる限り、ビルヒニアがエル・ビエホ・アルマセンに出る度に連絡してくれることになりました。

去りゆく“ブエノスアイレスの星”

最後に矢張りガイド兼通訳としてかねがね世話になっている原あやさんがビルヒニアの亡くなった前後の様子や思い出を伝えてくれました。(原さんの使っていたサーバーと私のサーバーとの相性が悪く通信が途絶えていましたが、彼女がサーバーを変えてくれて8月20日メールが届きました)

6月4日(水)の朝9時半ごろ原あやさんの自宅にVIRGINIAの弟のJOSÉ MARÍAさんからお電話があり、前の晩に姉が86歳でとうとう亡くなったとのご報告でした。

「姉VIRGINIAは日本と日本のタンゴファンをこよなく愛し、何時も日本での公演旅行(1990年9月)を懐かしく思い出していました。日本の皆さんの応援、心の籠ったおもてなしは彼女に取ってかけがえの無い貴重な経験でした。“何時かまた日本へ行きたい!”と口癖のように言っていた姉の望みを叶えられなかったことは残念ですが、姉に代わって再び日本の皆様に感謝します」

弟さんとはVIRGINIAを偲んで随分長いこと電話でお話しました。最後弟さんは泣いていました。私への御礼の言葉もありました。

VIRGINIAとは何回もEL VIEJO ALMACÉNで会いました。必ず楽屋へ行って御挨拶をしましたが何時も“MI QUERIDA SOMBRERITO ¿CÓMO ESTÁS? ¿CÓMO ESTÁN

MIS AMIGOS JAPONESES ?” (私の愛しの帽子ちゃん = これは私がいつも帽子を被っているからですが = 元気? 日本人の私の親友たちは如何しているの?) が口癖でした。一度タンゴショウの最中 (私はいませんでしたが) 舞台のケーブルに足をとられてひっくり返ったそうです。足の骨を折ったことが切っ掛けでその後は毎晩ではなく週に数回しか登場しなくなりました。

最後の彼女の舞台を見たのは確か去年の9月、私が通訳の仕事でVIEJO ALMACÉNに何人かのお客さんを御案内したときです。すっかり背中が丸くなったVIRGINIAはそろりそろりと階段をおり、お気に入りのハンサムなダンサーに手を取られての舞台登場でした。しかし舞台に立った途端のアーティストとしての変身は見事なもので、何時ものレパトリーを歌いこなす美声には全く衰えが感じられませんでした。

私達は2階のVIP席にいましたので、出演を終わって疲れ切った様子で階段を上がって来たVIRGINIAに手を差し伸べ“VIRGINIAさん! お久しぶり、帽子のあやですよ”と言いましたが、その目は虚ろで“ありがとう!” とひとと言ったまま楽屋に去って行きました。とほとほと歩いて行くLA ESTRELLA DE BUENOS AIRES(ブエノスアイレスの星)の後ろ姿が何か気になり、もしかしたらもう会うことも無いかもしれないとその晩のことは非常に記憶に残りました。

JOSE MARÍAさんが電話を切る前に言った言葉は “姉は舞台を生き甲斐にしていました。もう余りショウに出られなくなったので姉は死にました” というものでした。(原あや)

謹んでビルヒニア・ルーケさんのご冥福を祈ります。

(湘南アルゼンチンタンゴダンス同好会)

(会員著作紹介)

下記のお二人の著作が刊行されました。

大類善啓「或る華僑の戦後日中関係史」 明石書店 2014年9月初版発行

山本嘉子「ジャカラダ幻想」 ウエルテ 2013年10月初版発行

(外国人新入会員)

Juan Ríos さんが入会されました。

アルゼンチン共和国1954生まれ。1997年初来日。現在池袋でダンス・スタジオ経営・タンゴ関連の文化行事も行う。相撲好き。他に日本刀の鏝の研究も。

グロリア・米山

“新たな音楽の世界へ”



弓田 綾子

新緑が目に沁みる5月14日の夜、新宿御苑に近い四谷三丁目の路地を入った静かな住宅街の一隅にある総合芸術茶房・喫茶「茶会記」でグロリア・米山のライブコンサートがあった。

30名ほどでいっぱいの明かりを少し落とした店内は、どことなくあの“ボカ”を思い出させる。

当日の出演は能見 誠（ベース）、薄田真樹（マリンバ&打楽器）、そして歌手にはグロリア・米山の三人だけである。「La Morocha(褐色の肌の娘)」を十八番としているグロリア・米山が敢えてタンゴを含めて新たな挑戦を行った。



そして、今回のコンサートはコントラバスとマリンバという異色の楽器編成の伴奏だけに興味をそそられた。グロリアのレパートリーの中でも古典派タンゴを愛聴する者にとっては、多少の違和感を覚えるものの、そのパフォーマンスは十分に楽しかった。中でもグロリアの歌う「La Morocha」は、彼女の得意とする曲だけに、茶目っ気を交えた歌声に“メリハリ”があって、心に沁みだ。

また、当夜の新たな挑戦はタンゴばかりではなく、あのフランク・シナトラが歌って人気を博した「マイ・ウェイ」、「君偲ぶ夜」やアンコール曲「ラ・クンパルシータ」を、彼

女の得意とするスペイン語で見事に歌った。どの曲も広く知られているだけに大きな拍手が湧いた。歌い終わったグロリアの顔が生き生きと満足気に輝いていたのがとても印象的だった。

ただ「ラ・クンパルシータ」は名曲だけにコントラバスだけで歌うのは、極めて難しいことだと思う。コントラバスに語りかけるようにグロリアは歌っていたが、コントラバスの太く低い音がやや浮き出た感じがしたのは、実験段階なのだろうが、惜しまれる。

グロリア・米山は、常々“私はタンゴだけにとらわれず、自分の好きな音楽を、いつも自分自身が楽しんで歌いたい、結果は分からないけれど、挑戦してみたいの”と語っている。

そう、グロリア・米山は“タンゴ”だけにとらわれず、これまでの自分の枠を超えて新たな音楽の世界に挑戦したのだ。結果はどうあれ、その意気込みに心から拍手を送りたい。そして同時に、彼女の古くからのファンを代表して“決してタンゴも忘れないで！”と言いたい。

当日のプログラムを下記する。

【第1部】

1. Solo bajo loco コントラバス・ソロパフォーマンス 新タンゴ編 Part 1
2. Marimba flamenca マリンバ フラメンカ
3. La Morocha 褐色の肌の娘
4. コントラバスとスネアドラムのための音楽より March,Waltz,Serenade
5. Milonga sentimental ミロンガ センチメンタル

【第2部】

6. Solo bajo loco コントラバス・ソロパフォーマンス 新タンゴ編 Part 2
7. Escualo 鮫
8. A little prayer 小さな祈り
9. Mis noches sin ti 君偲ふ夜
10. Solo bajo loco コントラバス・ソロパフォーマンス 新タンゴ編 Part 3
11. A mi manera 私のやり方 (マイ・ウェイ)

【アンコール】

La cumparsita

第50回合宿コンサートより

主催：秋田中南米音楽同好会

宮本政樹

<温泉宿でのタンゴの楽しさ>

風薫る新緑の5月、都会の喧騒から逃れて、日本海を望む男鹿半島の景勝地、寒風山の麓にある自然に囲まれた男鹿温泉郷のくつろぎの宿、温泉に浸かり疲れを癒しながらのタンゴ三昧の旅。年を経てからの贅沢なタンゴ鑑賞の楽しい過ごし方である。

平成26年5月27日、秋田中南米音楽同好会（会長佐藤勝夫氏、NTA会員）の第50回目の合宿コンサートが秋田県の男鹿温泉郷において開催された。昭和42年からスタートし毎年恒例となっている温泉付きの一泊どまりのレココンであり、皆夜遅くまで秋田の美酒を酌み交わしながらタンゴ談義に花を咲かせるのはまたとない機会であろう（残念ながら私は酒が飲めなくとも二次会男だから楽しい）。会員相互間の交流を深める集いとしては非常に有意義であり、50年間も継続して実施しているとは全国でもめずらしく、すばらしいイベントである。



当日のプログラム

<伝統ある会「継続は力なり」>

秋田の同好会は昨年創立60周年を迎え、昨年の5月には田沢湖高原温泉郷で記念の合宿コンサートを開いており、全国でも京都や新潟に次いで古く伝統ある同好会である。今年の合宿コンサートにも各地からの参加者があり、青森、秋田、山形の東北勢の他に、新潟、長岡、群馬、埼玉、東京、横浜、大阪などから集まって来るのはイベントの楽しさに魅力があるからであろう。特に親交を深くしている新潟中南米音楽愛好会からは50回記念に合わせて15人も馳せ参じている。また過去には特別ゲストとして浜田滋郎、蟹江丈夫、高場将美、大岩祥浩、谷川越二、八木啓代、竹村 淳、阿保郁夫、ソッコ・マージュ各氏等の著名人を招待し、今年は阿保郁夫氏を再び招いて会を盛り上げている。わずか人口30万の都市で地域の文化振興の一環として、60年の長きに亘り地道な活動を継続されてこられた努力は称賛に値する。まさに「継続は力なり」。

参加者の中から各2曲ずつコメンテーターとして選曲をし、中南米の音楽として、内容はタン

ゴに限らずラテンやフォルクローレの曲も半分ぐらい含まれており、映像による音楽も鑑賞しながらバラエティーに富んでおり、合宿であるから2日間にも及ぶレココンである。現地に到着してから14:00から第一部が始まり3時間近く、懇親会の夕食で会員相互の懇談をした後に、19:00から3時間が第二部、翌日は朝食後9:00から3時間近くが第三部。2日間で計9時間近くにも及ぶレココンは初めての経験である。しかし雰囲気も堅苦しくなく和やかなムードでくつろいで聴くことができた。東京、横浜等のレココンは比較的堅苦しい話が多く（非常に勉強にはなるが）、こちらでは洒落とユーモアやジョークを交えて話をする人もいて楽しい雰囲気である。コメンテーターの中には中南米に長年仕事で駐在した人もあって、当時の音楽状況の話も興味をもって聞く事ができた。

下記にレココンのプログラムを記しておくが、ラテンやフォルクローレは省略してタンゴのみのプログラムに留めておきます。当会のレココンにおいて特筆すべき事はプログラムの充実である。昨年の60周年記念の合宿でもそうであったが、曲ごとに詳しい解説のレジュメを付けており、写真もふんだんに使い17ページにも及ぶ立派なものである。さらに毎月の定例会でもレジュメ付きのプロを作成するのは大変な作業であるが、参加者にとっては有難いもので、主催者の親切で行き届いた「おもてなし」の配慮がある。



<レココン・プログラム>

1. 高田幹雄（ビダリータ・ラテン・クラブ）（大阪市）
CATUZO（カトゥーゾ）（Osvaldo Ruggiero） オスバルド・プグリエーセ楽団
(1949年)
2. 宮本政樹（タンゴ倶楽部ノチェーロ・ソイ）（東京都）
パリで開花したラファエル・カナロ2曲選
LA MELODÍA DE NUESTRO ADIÓS（別れのメロディー） (1936年)
(Fioravanti Di Cico ~ C.Santiago)
RIEN QUE NOUS DEUX（二人きりで） 歌）ラウル・サンデル（1932年）
(Mario Canaro)
3. 泉谷隆男（アンヘル・バルガス・ファン倶楽部）（横浜市）（現、東京ボエミオ）
最近物故したアーティスト追悼の映像
Nelly Omar（1911.9.10 ~ 2013.8.10）
PARECE MENTIRA（嘘でしょう）（F.Canaro ~ Homero Manzi）

(1997年Club del Vinoにて)

4. 竹内 覚 (群馬中南米音楽同好会) (前橋市)
SEGUÍME SI PODÉS (もしよかったらついておいで) ファン・ダリエンソ楽団
(J.Caldarella ~ A.Scarpino ~ A.Anselmi) (1950年)
DEJE QUE L'ACOMPÑE (ついていきたい) フランシスコ・ロムート楽団
歌) チャルロ (1929年)
5. 名和恒彦 (群馬中南米音楽同好会) (桐生市)
森川ともゆきとタンゴアンサンブル (昨年の60周年記念の田沢湖合宿の帰りに群馬の会のグループで立ち寄った盛岡市のタンゴ・ライブ・レストラン&パブ「アンサンブル」での録音から)
演奏: 森川ともゆき (Bn) 花田慶子 (Vi) Bárbara (Pf)
EL CHOCLO (エル・チョコクロ)
QUEJAS DE BANDONEÓN (バンドネオンの嘆き)
6. 長利浩三 (弘前タンゴ・アミーゴス) (弘前市)
DON AGUSTÍN BARDI (ドン・アグスティン・バルディ)
ヌエボ・キンテート・レアル (Horacio Salgán) (1990年代)
Y TODAVÍA TE QUIERO (それでも君を愛す) オスバルド・プグリエーセ楽団
(Luciano Leocata ~ Abel Aznar) 歌) ホルヘ・マシエル (1956年)
7. 新保 優 (クラブ・南十字星) (長岡市)
エルビーノ・バルダーロ自作自演曲
Y A MÍ ¿QUÉ ME IMPORTA? (それがどうした)
ファン・ギド楽団 (1929年)
(Elvino Valdaró ~ Eduardo Moreno) 歌) ファン・ラウガ
MÍA (私のもの) アドルフォ・カラベリ楽団 (1933)
(Elvino Valdaró ~ Celedonio Esteban Flores) 歌) カルロス・ラ・フエンテ
8. 山田 正 (新潟中南米音楽愛好会)
LA CANCIÓN DE BUENOSAIRES (ブエノスアイレスの歌) 歌) ビルヒニア・ルーケ
(Orestes Cúfaro ~ Azucena Maizani ~ Manuel Romero)
9. 永澤敏博 (青森ラテンの会) (青森市)
ゲッツイ・タンゴ・デ・ストラディバリウス
MANOLITA (マノリータ) (1935年)
(Juan Llosas)
CABECITA (可愛い頭)
(Jino Filippini)
10. 七戸邦威 (埼玉県桶川市)
タンゴの新しい世界〜トリオ・モサリーニ
(J.ホセ・モサリーニ (Bn) グスタボ・バイテルマン (Pf) パトリセ・カラティーニ (Bj)
TRAVESÍA (トラベシーア) (Beitelmann) (1982年)

- NAOMI (ナオミ) (Mosalini) (1982年)
11. 小澤 忠 (秋田中南米音楽同好会)
今後耳を傾けたいフリオ・デ・カロのタンゴから
TIERRA QUERIDA (愛しい土地、愛する故郷)
(Julio De Caro)
フリオ・デ・カロ六重奏団 (1927年)
12. 佐藤勝夫 (秋田中南米音楽同好会)
アニバル・トロイロ生誕100年 (1914.7.22 ~ 1975.5.18) (DVDによる映像) QUEJAS DE
BANDONEÓN (バンドネオンの嘆き)
(Juan De Dios Filiberto) アニバル・トロイロ楽団 (1974年録画)
13. 赤田弘子 (秋田中南米音楽同好会)
EN ESTA TARDE GRIS (灰色の昼下がり)
歌) 阿保郁夫 (1965年の訪亜の際に坂本政一オーケスタ・ティピカ・ポルテニャの伴奏で
歌った映像)
(Mariano Mores ~ José María Contursi)



<東北リンコン発足の可能性>

高齢化に伴う会員の減少は地方も首都圏も同じ現象であり、タンゴ界が全国的に抱える深刻な問題である。今年新たに創立60周年を迎えた愛好会もあれば、60周年を迎える前に寂しく消滅してしまった会もある。若者達がタンゴに興味を示さなければ、日本タンゴ・アカデミーもいずれは消滅する運命にあるのは目に見えている。しかしまだ元気なうちは音楽の楽しみを求めて足を運んで来るのである。秋田の合宿コンサートには毎年各地から多数の愛好者がやって来るのは永年の交流関係が確立していて、主催者側が常に暖かく迎えてくれる姿勢にもある。今年の参加者は総勢38名であるがNTAの会員はたったの4名である(2名は主催者側)。趣味の世界である愛好会を永く継続させるのに重要な事は会員相互間の親睦のみならず、愛好会同士の人的交流も会を活性化させる原動力となるであろう。我々首都圏の人間には地方の愛好会の活動状況の情報がなかなか伝わりにくい。関西リンコンや中部リンコン以外の地域で、NTA関連以外でも地道に

地域活動をしている会も少なからず存在する。全国組織のNTAとしてはこのような愛好会にも積極的に働きかけて人的交流を深める事も必要であろう。また地方の会はタンゴのみならず、ラテンやフォルクローレを含めた愛好者の集まりが多く、その地域の特質をも考慮して東北リンコンの可能性を検討する必要がある、何よりもその地域の人達にとって楽しいイベントである事が重要であり、それがNTAへの会員増加の良い機会に繋がるような方向性を期待するものである。

秋田中南米音楽同好会を中心にした東北リンコン発足の可能性について会長の佐藤勝夫氏の現在の状況とそれに対する提言と要望事項を附記する。これらは他の地方にも共通する課題であるので共に検討する必要がある。

＜地方（秋田）からの声＞

1. 東北地区の会員数は発足時から少ない状況にあり（現在秋田3名、福島2名）、都市部との地理的問題が第一。各種イベントやセミナー等は首都圏開催だけで、参加する場合は多額の費用が掛かること。参加するにも毎回は厳しく、都市部会員と比べて不利益を感じる。これが地方会員の極端に少ない要因のひとつ。
2. 会員の高齢化に対処するための未来構想を考え、今後の事業の在り方に新規企画、目的を明示して会員を維持する具体的計画の立案と手段が今こそ求められている。都市部中心の活動から地方にも目配りをお願いしたい。
3. 高年齢化とともに趣味としての音楽鑑賞やダンスの潜在愛好者に対して興味をもたせる活動をする。
4. NTAの援助のもとに県外の会友の愛好家にも横の連絡を取り合いながら東北リンコンの設立を促す働きかけをする。
5. 具体策の例
 - 1) 都市部と地方との不利益の差の解消を図ること。
 - 2) 地方におけるタンゴ・セミナーの開催（年一度）をする。
 - 3) 入会金の減額をする。
 - 4) 非会員のタンゴ・セミナーは参加費1,000円程度とする。
 - 5) コメンテーターの派遣費用（旅費等）はアカデミーの負担とする。
 - 6) タンゴ・アカデミーの持っている財産？活用を願う。
 - 7) 提供できるセミナー資料、音源や映像を提供する。貸出または統一したマニュアルをもとに使用する資料を基に啓蒙活動（PR研修？）を地区毎で行う。
 - 8) 東北ブロック持ち回りセミナー・イベントの実施開催、地区ごとの談話会、懇親会を開催し友好を深めながら、新規会員の獲得と入会を勧める。

以上が秋田の佐藤氏のNTAへの提言であるが、これらはNTAの首都圏および地方を問わず全国のNTA会員全員で将来に向かって真剣に考えなければならない重要な案件である。今まで築き上げてきたNTAのタンゴの音楽を消滅させないためにも。

早川真平生誕100周年記念コンサート

「タンゴの黄金時代」

齋藤 富士郎

2014年6月25日に標題に示したようなコンサートが東京・銀座ヤマハホールで昼・夜2回構成で開催された。筆者は昭和33～34年頃、ヤマハ・タンゴ・コンサートでよくヤマハホールには通ったことがあり、それ以来50数年ぶりのヤマハホールであった。出演は早川真平記念グランオルケスタ・ティピカと銘打ったオルケスタと歌手の柚木秀子さん、えまおゆう（元宝塚）さん、それに特別出演の阿保郁夫氏であった。

早川真平生誕100周年と謳ってはいるが、早川真平氏の下で活躍した演奏家は家野洋一氏と柚木秀子さんのお二人の参加であった。司会者の説明では岡本 昭氏にも声をかけたが、体調の関係で出演は無理とのことであった。その他の出演者は

バイオリン：家野洋一、吉田 篤、宮越建政、外蘭美穂、向島ゆり子

ビオラ：宇野秀一／チェロ：鈴木穂波／ピアノ：丸野綾子／コントラバス：東谷健司

バンドネオン：鈴木崇朗、池田達則、力石ひとみ



柚木秀子 えまおゆう 阿保郁夫



家野洋一 宮越建政 向島ゆり子 鈴木穂波 東谷健司 池田達則
吉田 篤 外蘭美穂 宇野秀一 丸野綾子 鈴木崇朗 力石ひとみ

で、皆お馴染みの顔ぶれである。ただ、家野洋一氏は休憩後の第2部のみ出演であった。年齢を考えればこれもやむを得ないだろう。柚木秀子さんも第1部でEn esta tarde grisを歌われたのみで、すこし残念であった。柚木さんも決して若くはない（失礼!!）が、それでもあの見事な歌声を聴くともっと歌えたのではないかと思ってしまう。

紙面の関係上、演奏曲目をすべて紹介はできないが、古典曲に加えてピアソラの作品も2曲あった。これは早川氏が生前ピアソラ作品を積極的に取り上げられていたことを反映してとのことであった。それとエクトル・バレラ作のRepetidoが演奏されたのは珍しかっ

た。この曲は日本の楽団がもっと取り上げてよいと思うが、意外にそうでないのは何故だろうか？

オーケストラのメンバーはいずれも腕利き揃いであり、人数も多かったので演奏のパフォーマンスについては今更いうことはない。ただ臨時編成ということもあってアンサンブルに若干の難が見られたのはやむを得ないと言ふべきであろう。

白状すると阿保郁夫氏の特別ゲスト出演については開演前には期待していなかったのだが、それは見事に裏切られた。阿保氏は現在では歌うことはできない状態であるが、その代わりにLos ejes de mi carretaとLa última copaを、始め、歌詞を日本語で解説し、その後、CDによるインスト演奏をバックにスペイン語の歌詞をレシタードされた。これが絶品で、当日の最高の演目であったといってよいだろう。会場でも「これを聴いただけで今日は満足だ」という声も聞かれた。

当日は会場でプログラムが配布されず、代わりに司会者が演奏曲目をその都度紹介したが、やはりプログラムが配布されないことに不満の声があった。幸いにも当日出席された吹田市の吉澤義郎氏が精密なプログラムを自ら作成し、それを筆者に送って戴いたので、この文章を書く上で大変助かった。この場を借りて吉澤氏に深甚の謝意を表します。

なお、コンサートとは直接関係ないが、当日会場で同時発売の形で販売されたCD「タンゴの黄金時代」は再編集ものではあるが、私のような昔の音源を持っていない者にとっては便利なCDである。ただ、残念なことにパンフレットにオーケストラ・ティピカ・パンパをオーケストラ・ティピカ・東京、El llorónの作者をJuan Maglio、El huracánの作者をNolo Lópezとするような記載ミスがあった。このCDはタンゴにあまり詳しくない人たちも聴くであろうから、このようなミスはいただけない。

早川真平 生誕100周年記念 コンサート
タンゴの黄金時代
今年2014年はタンゴの巨人、そして日本におけるタンゴ普及の功労者、早川真平の生誕100年にあたる。この節目の年に早川氏ゆかりのゲストを交え、若く有名なタンゴミュージシャンによる記念コンサートを開催。

＜主な曲目＞
メタ・フィエロ 淡き光に、バイア・ブランカ パンドネオン 嘆き ナケ
夜のプラットホーム 奥様お手をどうぞ 灰色の午後 はか

＜出演＞
早川真平記念
グランオーケストラ・ティピカ
バイオリン：室野洋一 吉田真 宮崎健哉 外野隆雄 内田伸子
ピオラ：宇野秀一/チェロ：鈴木龍雄/ビオラ：丸野綾子/ベース：東谷健司
パンドネオン：鈴木崇樹 池田達朗 力石Dとみ
鈴木秀子
又まおゆう (東京交響楽団コンサートマスター)
阿保郁夫 (特別出演)
MC：阿保郁夫
早川真平 指揮

絶賛発売中
タンゴの女王 藤原ミチ子ベスト
Price: 6000円 ¥1,700 (税込)

日時：2014年 6/25 昼の部 15:30開演 夜の部 19:00開演
[開場 15:00] [開場 18:30]
場所：ヤマハホール 東京都中央区銀座7-9-14
全席指定 6,000円(税込) 当日 6,500円(税込)

主催：早川真平生誕 100周年コンサート実行委員会
協力：ユニバーサルミュージック 日本アメリカン音楽出版株式会社 関口和子 ヤマハホール
チケット問い合わせ先：Confetti(カンフェティ) 0120-240-540(平日10:00-18:00) WEB予約 http://confetti-web.com/
事務局：問い合わせ 080-5591-3350

日本に根を下ろした『ブエノスアイレスのマリア』

—2014・7・15板橋区立文化会館大ホールでの公演を聴く—

大類善啓(葛飾区)



早めに入場すると大きいホールは徐々に人々で埋まってくる。ほぼ満席である。いつものことだが、ピアソラ公演ではタンゴ仲間を見ることは少ない。それでも二人の知人に会った。会場に入ってくる人たちを見ていると、どういうわけか年配の女性が多い。雰囲気から察すると、今までのタンゴファンではないような気がする。たぶんタンゴダンスも知らない人たちなのではないか、そんな感じがした。

後で知人に訊けば、小松亮太(以下、亮太と略す)は、今度の公演の一つは「下町でやりたい」という話だったらしい。東上線「大山」駅そばのこの会場は、私の「下町」概念からすると違う。要は庶民的な街で公演したいということではなかった

か。亮太の言葉が本当かどうかは別として私自身、板橋区立文化会館に足を運んだのは初めてだった。公演前に主催者は、亮太によるタンゴ教室を開いたという。月刊誌『ラティーナ』でその情報を得ていたが行けなかった。そういう教室の効果もあり、あまりタンゴになじんでいない人たちも会場に詰めかけたのではないか。これはあくまでも私の推測である。

難解な詞を超えて聞えてくるもの

出演者が舞台上で勢ぞろいした。演奏する前の冒頭、亮太は今日の演目について丁寧に解説をした。「登場するマリアはタンゴの化身かもしれませんが。詞は言葉の韻を踏んでいます。しかし難しく、なかなか解りません。実は、彼の地の人に詞の内容は解るか訊いたところ、スペイン語で聴いても意味が解らないと言っていました。アルゼンチン人が聴いても何を言っているのか解らないということです。アルゼンチンは移民の国です。イタリアやスペインからやって来た人々の末裔で、そこに居るインテリは、複雑なコンプレックスを抱えています」というような趣旨の説明を行った。

聴衆に「詞は難しいかもしれないが、そんなことを気にせず、大いにピアソラのタンゴ音楽を楽しんで聴いてください」という思いやりなのか、なかなか心遣いが優しい。

昨年（2013年）、亮太が強力に推進したアメリータ・バルタールを迎えての『ブエノスアイレスの MARIA』（以下、タイトル全体を表す時は〈MARIA〉とし、単なる主人公として表す場合は〈MARIA〉とする）の公演に出かけた。素晴らしい公演だった。これ以外にも、ギドン・クレメール率いるオーケストラ〈クレメラータ・バルティカ〉とフリヤ・センコ主演の〈MARIA〉公演、またミルバが演じ歌った〈MARIA〉も聴いたことがある。その折りには字幕で歌詞の日本語訳がスクリーンに映し出されていた。

アストル・ピアソラ（作曲）とオラシオ・フェレル（作詞）の名コンビが創作したオペレータ（小オペラ）と名付けたこの組曲の詞は、確かに難解だ。字幕に映し出された日本語を追っても正直言って素直に頭には入ってこない。亮太がいみじくも語ったように「アルゼンチンの人たちがスペイン語で聞いても解らない」と言うほどの難しさなのである。

私が敬愛してやまないラトヴィア出身のユダヤ系ヴァイオリン奏者クレメールは、こんなふう言っている。「詩は、翻訳するとその本質を失ってしまうことがしばしばある。〈MARIA〉の台本に関してもその危険はあり、実際これはほとんど翻訳不可能な側面を持っている。全体の内容はきわめて象徴的で、超現実的であり、同時にブエノスアイレスの生活に深く根ざしている。さらにここで使われている比喩は、外国語には移し替えられない性格のものである」。『MARIA・ファタール』（クレメール／ピアソラの〈MARIA〉CDから）と題した文章で、このように書き、この曲の価値はタンゴの概念だけで捉えられるものではないと言う。逆に、タンゴはピアソラ／フェレルという黄金コンビの〈MARIA〉によって、さらに豊かなものになったと言う。そして、〈MARIA〉体験を通して「わたしは常日頃から、〈自分はピアソラに恋しているのだ〉と言ってきた。しかし〈MARIA〉の後、わたしはこれが本当の愛になったのを感じている」とまで言わせるのだ。

MARIAに体現された愛と哀しみのタンゴ

確かに詞を追いかけてもストレートに頭に入らないが、しかし、組曲〈MARIA〉に素直に耳を傾けていると、本当に素晴らしい。このピアソラ作品は紛れもなく、アストル・ピアソラの最高傑作であると思う。

アメリータ・バルタール主演の時のナレーターは、ギジェルモ・フェルナンデスだった。ギドン・クレメール／フリヤ・センコの公演の時は、作詞者であるオラシオ・フェレル自身がやった。しかし今回のナレーターは片岡正二郎の日本語によるものだ。私は初めて片岡を知ったが、芝居の役者として活躍しているという。

本稿では、台本や物語について3つのCD、即ち、昨2013年〈小松亮太デビュー 15周年記念アルバム〉アメリータ・バルタールを迎えたライブ版を主に、とりわけ対訳については比嘉セツに依った。また1997年98年に録音されたギドン・クレメール&クレメラータ・ムジカ版、そして1968年8月録音されたオリジナルキャスト版などを参考にして書いている。

さて、第1部第1場<アレバール>が始まると、もうピアソラの世界である。

アレバールは「タンゴの演奏を始める合図」だという。ピアソラ独特の哀しみの旋律、そして躍動感。狂言回しでもある小悪魔が語る。「今 もう二度と戻らぬ 少女マリアよ」

第2場<マリアのテーマ>では、マリアを演じるSAYACAが、ララーラ ララーと独白のように詞のない歌を歌う。鬼怒無月のギター、井上信平のフルートが冴えわたる。

第3場<狂ったストリートオルガンへのバラード>では、小悪魔は「少女マリアは7日で大人になった」と告げる。

小悪魔という存在の語り部である片岡のやや高い声が、初めの頃は私には気になった。やや上ずったように聞えた片岡の声だが、日本語によるナレーターという役に緊張しているのかもしれない。もう少し低くて、太い声が欲しいところだ。しかし片岡もだんだんと乗ってきて、曲が進むうちにとても良くなってきた。

小悪魔が言う「すべての女性の中で 忘れ去られたお前」。そしてパジャドール（大草原の吟遊詩人）は「ブエノスアイレスの悲しみのマリア」と何度も呟くように歌う。

第4場、少女マリアに捧げる<カリエゴのミロンガ>に続く第5場のインストゥルメンタル<フーガと神秘>に入ると、もう完全にピアソラ世界に酔ってしまう。演奏陣11人のアンサンブルも絶妙で申し分ない。独立して演奏されることも多いこの曲だが、ここから第7場までが第1部のクライマックスと言っていいだろう。

第7場<罪深きトッカータ>は、亮太のバンドネオンが時にむせび泣くように聞え、時に怒りを爆発させるように胸に迫ってくる。

この会場では亮太が一曲ごとにまず曲名を言い、時に短い説明をする。聴衆は曲が終わるごとに熱い拍手を送るが、この7場の後はとりわけ熱烈な拍手が続いた。

第8場<古代の盗賊たちのミゼーレ> 古代の盗賊たちの声「喘ぐマリア 祈りのマリア」。そして売春宿のマダムたちの声「古代の大盗賊たちよ 彼女の心は・・・死んでいる！」

娼婦マリアの心がすでに死んでいるという。マリアは死んだ！

存在感を見せたSAYACA

第2部 第9場 <葬儀に捧げるコントラミロンガ>

小悪魔が「ブエノスアイレスのマリアが初めて死んだ」と語る。初めて死ぬ?! 人は何度も死ぬのだろうか。何度も死に、生き返る。輪廻転生を意味するのだろうか。西洋の神話や伝説でも死と再生のドラマはある。死んだマリアは、さて・・・

<マリア>がタンゴの化身なら、タンゴは紆余曲折を経ながら、不死鳥のように今、生き返っていることを語っているのだろうか。

第10場 インストゥルメンタル<夜明けのタンガータ>、第11場<街路樹と煙突への手紙>と続いた後は、一番長い9分ほどの曲、第12場の<精神分析医たちのマリア>だ。

ブエノスアイレスのサーカスに精神分析医が登場し、マリアの分身“マリアの影”に問いかけ、彼女の深層心理を開かせようとする。



マリアは心の奥底を、無意識の闇の中に潜む声を語る。精神分析医と“マリアの影”とのドラマ的なやりとりが展開される。「目を閉じて マリア そうすれば見えるから 平らな中庭に 歌がひとつ そこに聞こえてくるだろう それは君の母さんの嘆き？」マリアは「分からない」「そんな筈はない」と言い、戸惑いながら精神分析医と対話を交わす。

日本では精神分析医は本当になじみがない。が、聞くところによると、ブエノスアイレスのインテリたちにとって、精神分析医は極めて身近な存在のようである。少しばかりの不安定な精神状況に陥ると、すぐに精神分析医のドアを叩くという。

実は今回の公演で主役のマリアを歌い、タンゴの歌手として一層の表現力と存在感を見せたSAYACAは、ブエノスアイレスに6年ほど滞在し、アメリータ・バルタールなどに師事したタンゴ歌手として素養を培っている。その彼女が公演に先立ち、友人たちに送った文章の中に、この《マリア》に占める精神分析医について語っている部分があるので紹介しよう。

ポルテーニョ、ポルテーニャに見る精神分析の様相

＜ブエノスアイレスの中流階級以上の人は、一生に最低一度は精神分析の経験がある、というほど、人々の生活に根付いているものであり、日本で言えば、マッサージや占いに行くぐらいの気軽さで、人々は精神分析に通います。例えば、何かに悩んでいる人がいると「私の精神分析医を紹介してあげるわ」「僕のこの前の精神分析医はとても良かったから、連絡先を教えてあげるよ」という風に、日々の生活の会話の中でも、「精神分析」（直訳はpsicoanálisisですが、日常で使われるのは‘terapia テラピア’ = セラピー）という言葉は、非常に良く使われます＞というほどなのだという。

また、私の親しい友人で、大学を卒業するまでブエノスアイレスで育った女性は、「精神分析医に通うことが、あたかも自分がインテリの証拠であるかのような精神状況がブエノスアイレスにある」と言う。

これほど近い存在である＜精神分析＞は周知のように、19世紀末のウィーンで育ち暮らしたユダヤ人、ジグムント・フロイトが発明したものである。世紀末ウィーンの不安の時代に生きたフロイト自身、絶えずユダヤ人であるというマイノリティー（少数派）としての不安や、人々が共有する偏見や幻想を取り除きたいというところから生まれた精神分析は100年を経て今、ブエノスアイレスの知識人たちを虜にしているようなのだ。

ここで＜マリア＞を歌うSAYACA は素晴らしい。よどみもなく、ブエノスアイレスの言葉でタンゴを歌える日本人タンゴ歌手では今、彼女が一番だろう。そうして迎えた第15場＜受胎告知のミロンガ＞。この曲もまた独立して聞かれる曲だが、本当に最高だ。万雷の拍手で迎えたアンコールでもこの曲が歌われた。

聴衆は一曲ごとに拍手、最後は亮太を含む全員にはブラボー！ の声、そしてマリアを歌ったSAYACAにはブラボー！ という声が飛んだ。男性ボーカルのKaZZmaも良かった。彼の声を聴くのは初めてではないが、この公演の収穫はKaZZmaを知ったことも大きい。



黒田亜樹のピアノ、近藤久美子のヴァイオリンをはじめ、いつもながらの実力派の演奏陣で臨んだコンサートは改めてタンゴの素晴らしさ、ピアソラの素晴らしさを堪能させてくれ、タンゴ音楽の豊かな情感をたっぷりと味わわせてくれた。一段と成長したSAYACAの〈マリア〉、そして見事な11人のアンサンブル、それを支えた亮太の果敢なるチャレンジ精神で生まれた〈マリア〉公演、『ブエノスアイレスのマリア』が本当に日本に根を下ろしたと思った夜だった。

「タンゴこぼれ話（第2回）」（13頁）でロシアでは El choclo がアルゼンチン国歌にされたというエピソードが紹介されたので、ここでホンモノを掲載します。（Wikipediaより）

アルゼンチン国歌

作詞：Vicente López y Planes（ビセンテ・ロペス・イ・プラネス）

作曲：Blas Parera（ブラス・パレーラ）

【前奏】

¡Oid mortales! el grito sagrado:	聞け、皆の衆よ、神聖なる叫びを
¡Libertad, Libertad, Libertad!	自由よ！自由よ！自由よ！
Oid el ruido de rotas cadenas:	鎖の干切れる音を聞け！
Ved en trono a la noble Igualdad.	高貴な平等が王位に就くのを見よ
¡Ya su trono dignísimo abrieron	それら最も栄誉ある王座は開かれた
Las provincias unidas del Sud!	南部連合州に対して
Y los libres de mundo responden:	世界の自由な人々は応じる！

¡Al Gran Pueblo Argentino Salud!	偉大なアルゼンチン人に対して、敬礼！
¡Al Gran Pueblo Argentino Salud!	偉大なアルゼンチン人に対して、敬礼！
Y los del mundo responden:	世界の自由な人々は応じる！
¡Al Gran Pueblo Argentino Salud!	偉大なアルゼンチン人に対して、敬礼！
¡Al Gran Pueblo Argentino Salud!	偉大なアルゼンチン人に対して、敬礼！
Y los libres del mundo responden:	世界の自由な人々は応じる！
¡Al Gran Pueblo Argentino Salud!	偉大なアルゼンチン人に対して、敬礼！

【間奏】

Sean eternos los laureles	栄冠よ、永遠のものになり給え
Que supimos conseguir.	我ら一人一人は勝つために奮闘す
Que supimos conseguir.	我ら一人一人は勝つために奮闘す
Coronados de gloria vivamos	栄光の冠を戴き生きん！
O juremos con gloria morir.	しからずんば、栄光において死ぬのを誓わん！
O juremos con gloria morir.	しからずんば、栄光において死ぬのを誓わん！
O juremos con gloria morir.	しからずんば、栄光において死ぬのを誓わん！

《参考》 アルゼンチンの国歌は5分を超え、世界で一番長い国歌といわれている。一般的に競技大会等においては、短縮して演奏されている。

東京バンドネオン倶楽部

第17回演奏会を聴く

大澤 寛

9月26日夜。満席の四谷区民ホール9階。第17回は発足20周年記念公演でもある。育ての親の小松亮太が冒頭に短く感慨を述べた。「親としては“おめでとう”と言うべきなのかどうか。しかしよくここまで来た」と。客席から拝見すると男女を問わずバンドネオン奏者の年齢層の拡がりに気付く。発足時の亮太は20歳だったそうだ。そしてその当時50～60歳代のプレーヤーが今日も健在であられる。

(第1部)

先ず古典曲が続く。立ち上がりはオスバルド・フレセドの「¿Por qué?」(何故?)でBn陣は4人。続いては唄が入って「Caminito」。唄い方を変えた感のあるKaZZmaが伸びのある声を聴かせる。3曲目は「碧空」。小松亮太編曲で楽器には静かなパーカッションも加わる。

この倶楽部の演奏会の常としてアマチュア・バンドネオン陣を支えるプロのプレーヤーの全員が当代一流かつ最前線の人たちである。4曲目からはBnに早川純が加わってマリアーノ・モールの「Uno」と「Tanguera」が続く。亮太の紹介で「様々な仕事や家庭を持った人々がこうしてバンドネオンに打ち込んでいるのは嬉しい。今の(注:曲が変わるたびにBn陣は一部または全部交替する)メンバーには昼間は体育の先生という人もいる」という。6曲目はフランシスコ・カナロの「Sentimiento gaucho」。編曲はピアソラによるもの。早川純が立って弾くスタイルのBnソロで往時のピアソラを偲ばせる。

7曲目は葉加瀬太郎作曲の「WATASHI」。亮太の愉快的な曲目紹介は「別のジャンルの曲を無理やりタンゴにしたもので、古典中心の第1部ではただひとつの“邪道”だと。そして8曲目はBnに再び亮太が加わっての唄ものでカルロス・ラサリ作曲の「Calla, bandoneón」(黙ってくれよ、バンドネオン)。ここでロベルト・杉浦が登場。一見コミカルに見える持ち味は変わらないが、オスカル・ルーベンスの歌詞に情感をこめて見事に唄い上げる。8曲目はフリアン・プラサの「Danzarín」。もちろんダンスが入って桑原和美と佐藤利幸のペアに魅せられる。

そして第1部の最後はビクトル・ラバジェンが2003年に亮太との共演のために作曲した「ブエノスアイランド」(「Cantando」や「Silbando」、「Taconeando」などにみられる“何かをしながら”なのだが造語。強いて訳せば“ブエノスアイレスに生きて”か?)。短いが的確でしかも感慨を込めた亮太のコメントは「自分は大編成での演奏を好むものである。バンドネオンを弾く人たちが増えているのは実に嬉しい。底辺が拡がり層が厚くなる。だからこその倶楽部も成り立っている。そしてアジアの国々とくに韓国や台湾にもバンドネオン奏者は確実に増えている」と言うもので、亮太を含む7名編成のBn陣には、今回が初めてという彼の韓国での弟子筋に当たる4

人の奏者が加わった。東京バンドネオン倶楽部は奏者が交替する際の舞台の“片付け”の速さが売り物のひとつだが、曲目・編成の紹介をしていた亮太が自分の使う楽譜を楽屋に取りに戻るといふ“事件”があり、その間訪日プレーヤーたちが英語で場つなぎをするという国際色豊かなものになった。

(第2部)

15分の休憩を挟んで第2部はKaZZmaの唄で始まった。カルロス・ディ・サルリ作曲・エクトル・マルコー作詞の「Nido gaucho (ガウチョの巢)」。“俺の夢に花が咲いて 二人の心が繋がるだろう はい と言ってくれよ”という美しい求愛の歌詞だが、日本で唄われることは少なかったのではないかと。KaZZmaが取り上げたのは嬉しい。2曲目は「Canaro en París」。女性4人のBn陣には韓国からの客演も加わる。終幕の見事なバリエーションには途中で拍手をしたくなかったが辺りが静かなので我慢する。そしてこの曲の演奏中楽屋では今日の特別出演ホアン・ホセ・モサリーニが、身を乗り出して観ていたという亮太の紹介があって、会場の期待が高まる。

そしていよいよマエストロの登場。曲はこれもマリアーノ・モーレスの「Taquito militar」と告げられる。ここでピアノが松永祐平から久保田美希に交替。「長い曲になるので」と亮太はモサリーニのために譜面台を2台分繋ぐ。モサリーニの両脇を、パリで彼に師事する早川純が師弟共演の形で、そしてもう一人はこの倶楽部の新会長の安達亮さんが固める。

そして次は近藤久美子のバイオリンとのデュオで「Los mareados」。静まり返った会場に近藤のバイオリンが冴える。3曲目はタンゴ・ファンには珍しいもので「Al diablo con diablo (悪魔のところへ悪魔と共に)」。モダン・タンゴの世界での盟友ロドルフォ・メデーロスが1970年代に作曲したもので元はロックのためのもの。亮太によれば「モサリーニさんは43年ぶりにこの曲を演奏するのに先立ち、わざわざメデーロスさんに電話をかけたそうです」とのこと。バンドネオンの他にはパーカッションおよび西嶋徹のコントラバス、さらに今夜この曲のために出演という矢口博康のアルトサクソフーンが加わり、観客席には熱気が溢れる。続いては「Azabache」。再びダンスは和美&利幸。実に綺麗な舞台である。それに被せるようにロベルト・杉浦とKaZZmaの



モサリーニと近藤久美子

唄が入る。ドゥオならではの「オーオーオー」が聴かせる。そして次はロベルトがお得意の「Balada para un loco」を客席まで降りて語りかける熱演。あっという間に過ぎた時間の最後の曲はビクトル・ラバジェン編曲の「La maleva」。

バンドネオン陣は亮太を含む男性3女性1の構成。この曲に対する亮太の思い入れが伝わってくるようだった。

ますます盛り上がる会場からの拍手に司会は控えめに「アンコールということでしょうか？」と問いかける。さらに鳴りやまぬ拍手の中のアンコール曲は、ラテンリズムの定番で '89年に大流行したと言うLambadaを全員が総出で。華やかな幕切れであった。



フィナーレ

報告を書くためにメモを取っていると聴くことに集中出来ないことがある。報告の基礎は配布されたプログラムに任せようと横着を決めて聴き入った。アマチュアである会員と小松亮太を始めとする友情・特別出演のプロのメンバーと客席とが、これほど心地よく溶け合う演奏会が他に
あるだろうか。次回も強く期待する。

「全国会員の集い」のご案内

日 時：2015年2月28日（土）

会 場：メルパルク東京
東京都港区芝公園 2-5-20
Tel：(03) 3433-7212（代）

なお詳細はTangueando en Japón No.35（2015年1月発行予定）に記載します。

（編集部）

秋のタンゴショー武蔵浦和

「トリオ・ロス・ファンダンゴス」演奏会



大澤 寛・齋藤 富士郎

秋晴れの武蔵浦和。JR武蔵浦和駅西口を出てすぐの会場はサウスピアの9階多目的ホール。9月28日（日）の午後、タンゴの普及に尽力して居られる亀山寛さん（NTA 会員・「タンゴクラブ21」主宰）の主催で「秋のタンゴショー武蔵浦和」（NTA後援）が開催された。出演は“九州の（もはや全国区だ！）愉快なタンゴ楽団” トリオ・ロス・ファンダンゴス。入場者は130名を超えたと聞く。

島崎長次郎さん（NTA名誉会長）から楽団の由来やメンバー紹介（ピアノ：秋元多恵子 アコーディオン：いわつなおこ バイオリン：谷本仰）が行われた。中でも谷本仰の経歴はユニークなもの。キリスト教新教バプティスト派の牧師さんであり、音楽療法セラピストであり、さらに認定NPO団体「北九州ホームレス支援機構」のメンバー、そして本業のタンゴ演奏家というもの。

谷本のトークが楽しい。冒頭に観客に“拍手の仕方”の“説教”があり、演奏のノリと拍手の強さの関係を説くもので、この話が上手い。トリオ結成は1999年。始めは“何でも屋”だったが数カ月で自然にタンゴに専念することになったという。なお、このトリオのモットーは“明るく・楽しく”なので、暗い色の衣装は着ないそうだ。

そして早速第1部が「Milongueando en el 40」「Café Domínguez」の小気味よい演奏で始まる。第1部は演奏がプログラム記載の6曲（この2曲に加えて「La trampera」「Adiós pampa mía」「Recuerdo」「Libertango」）に加えてエキストラに「El amanecer」。谷本のバイオリンが牧歌的な牛の声を奏でる。ダンスが2曲。加藤博樹&KEIKO のペアで「Bajo un cielo de estrellas」と「Loca」。児玉康子の唄の2曲は「Lo han visto con otra」と「Mi noche triste」。

休憩の後は30分のミロンガタイム。CDによるものだが最後の1曲は生演奏で「Buscándote」

第2部では島崎解説でfandango の由来および谷本トークでlunfardo についての説明があり、さらに谷本によればこのトリオの公演時にはよく台風が来るのだと。「嵐を呼ぶタンゴ・バンド」の異名が付いているそうだ。2部の構成もバランス良く演奏が6曲ダンスと唄がそれぞれ2曲。演奏曲は「Saludos」に始まって「Flor de lino」「El día que me quieras」「Por una cabeza」「Derecho viejo」「Pensalo bien」。ダンスは「Al galope」「Gallo ciego」そして児玉の唄は日本の歌メドレーで「黒い瞳」「夜のプラットホーム」「水色のワルツ」ともう1曲は「Fumando espero」。

3人のメンバーの腕前は“達者”の一言に尽きる。特にアコーディオンのいわつなおこの達者なにはあきれ返ると言ってよい。アルゼンチン・タンゴをアコーディオンで演奏するのは何となく「バンドネオンの代用品」のイメージがあるが、どうしてどうして駆け出しのバンドネオ

ン奏者顔負けの名演。ピアノならクロマティック配列の鍵盤を両手でカバー出来るからまだよいが、アコーディオンの鍵盤を片手でディアトニック・バンドネオン並みにバリエーションを弾きこなしたのはただ驚きである。バイオリンの谷本は良い意味で、さらに褒め言葉としての“乞食節”そのもので、こういうバイオリンは日本とアルゼンチンを含めて他のタンゴ楽団では先ずお目にかかれない。これぞ下町のタンゴのバイオリンである。ピアノの秋元多恵子には流石にクラシックの素養があると睨んだが、それでもこれ又“乞食節”のピアノで、本質的に音量の小さいトリオを引っ張っての大活躍であった。

その間にも谷本のトークは3度のアルゼンチン公演のこぼれ話。チャカリータ墓参では墓のサイズの大きさやら、夜遅く（朝早く！）からの演奏の後もしっかり肉やパスタを食べたことが愉快に語られる。「El día que me quieras」はバイオリンとアコーディオンは客席までやって来ての熱演。そして谷本のエンターティナーとしての見せどころは「Por una cabeza（首の差で）」。自分より年下の男に女を取られた男が“取られはしたが大差ではなかった”という恨み節の“サワリ”を日本語に訳して観客が歌えるように誘導し、歌の終わりで小さく切った紙をポケットから出して投げ上げたのは“ハズレ馬券”のイメージか。そして「Pensalo bien」は女に捨てられる男が別れ際に女に向かって“良く考えろよ”という歌詞を谷本が歌手として演じたもの。始めに谷本から教わったとおりの大拍手が湧く。谷本の歌は、もちろん職業歌手のものではないが、大道芸として立派なものである。さらに「Derecho viejo」は3人で大編成に負けない迫力を出すという熱演。

優れた音楽性と上質のユーモアに富む楽しい舞台だった。是非再び生で聴きたい。このトリオはこれまでに4枚のCDを出しているが、今度5枚目を出した。 (290914)



ピアノ 秋元多恵子、バイオリン 谷本 仰、アコーディオン いわつなおこ

ジャカラндаはタンゴの花

山本 嘉子(練馬区)

☆よもやの我が家に



今年6月、我が家に思いがけないことがあった。

ジャカラндаの花が咲いたのだ。ブエノスアイレスでその花盛りに出合ってから、すっかり魅了されていた花なので、予期せぬ出来事に暫らくの間は夢見心地で過した。

そもそもは3年前のこと、都心に住む友人から高さ50センチほどの細い苗木を貰い受け、鉢植えでヴェランダに置いた。当時、人から聞いたり検索したりの情報では「開花には10年から20年かかる」「日本の気候では素人管理は難しい」などと、落胆することばかりだった。その段階で、花を見ることはほとんど諦めた。ただ、羊歯のような葉は涼しげで、夏にはヴェランダの陽射しを遮ってくれる。ガラス戸に落ちる影が揺れて、ふと暑さを忘れる嬉しさで、2年間は観葉植物として楽しんでいた。ところが6月に入った或る日、幹は3本になり大人の背丈ほどに育った木のでっぺんに、ぽつぽつと蕾を付けた芯を発見した。瞬間、蕾の筈はないと近寄って目を凝らした。その後、朝晩はもちろん日中も見つめ続けて、間違いなく蕾であることを確信する。そして3日目、最初の一輪が花開いた。房状に付いた蕾は下から順に開花して、やがて全体が紫色に華やいだ。ロート状の花一輪は小さいのに、一斉に花開いた最盛期のひと房は、気品すら感じて美しい。最後の一輪が散るまでの2週間、降って湧いたような出来事に、毎日の変化を堪能した。

ジャカラндаを初めて知ったのはアルゼンチンでのことだった。ブエノスアイレスに到着した日のジャカラндаは咲き始めで、滞在中に花盛りを迎え、帰国の日には落花が歩道を紫色に染め始めた。花の時に合うのは真に難しいが、予期せぬ出会いだった。思えばブエノスアイレスはタンゴの魅力に引かれての旅先だったが、花好きには至福の旅になった。以来、ジャカラндаの花は、わたしの中ではタンゴの花になっている。



我が家に咲いたジャカラнда

☆アルゼンチンタンゴと二度の出会い

アルゼンチンタンゴに心打たれた二つの場面をはっきりと覚えている。

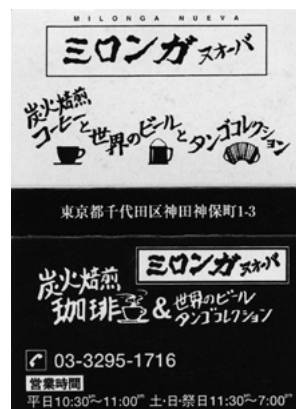
学生時代を暮らした女子寮の大広間に、縦長、箱型の電気蓄音機が据えてあった。週末には同好者が集ってよくレコードを聴いた。当時、レコードは貴重で、所有者は少なかった。持ち寄るジャンルはいろいろで、クラシック、ジャズ、シャンソン、オペラのアリア集などと何でもありの中に、藤沢嵐子のレコードを持つ友人がいた。いろいろ聴く中でアルゼンチンタンゴの哀愁とリズム、バンドネオンという楽器の音色にたちまち心奪われた。「アディオス・パンパ・ミーア」を歌う嵐子の高く伸びやかな歌唱と鮮やかなスペイン語の発音に感動した。故郷を離れて上京2年目、やっと東京にも慣れてきた20歳の日のタンゴとの出会いだった。

間もなく30代に入るところだった。仕事に必要な本を探しに神保町に出かけた。目的の本はなかなか見つからず、小さな古書店にやっと探し当てたときにはかなり疲れていた。路地に迷い込んで、店の名前も知らずに通りがかりの喫茶店のドアを押して入る。音楽が流れている。バンドネオンの音色が聞こえてタンゴと分かる。薄暗い店内の壁ぎわの席に着くや、バンドネオンの演奏が激しく軽快に連続して自分が高揚してくる。かすかなピアノの一打で店内の音は消えた。自分の中には哀切なメロディーと終盤のバンドネオンの演奏がまだ流れている。コーヒーが運ばれたことにも気づかなかった。タンゴに心打たれた二度目の記憶である。

喫茶店の名は「ミロンガ」、曲は「レクエルド」、演奏はプグリエーセであった。喫茶店を出る時に店のスタッフに訊ねて知った。帰路にレコード店を巡って、三軒目で手に入れた初めての一枚を宝物にして何回聴いたことか、擦り切れるほど、という言葉通りだったと思い出す。

その後、フィルポ、カナロ、フレセド……と、レコードは2枚、3枚、5枚、10枚と増えたころ、働きながらの家事と育児の日々は、まさに女の戦場^{いくさば}だった。しだいにタンゴを楽しむ自分だけの時間はなくなり、タンゴを忘れていった。わたしの「タンゴ事始め」はこの二つの場面であったかと、今、思い出す。

それから30年も経て再々度のタンゴとの出会いがあり「3度目の正直」との言葉通り、タンゴに深入りすることになる。やがて仕事も離れ、時間も出来て、今度こそその関わりは今も続いて、間もなく20年になろうとしている。



☆地域にタンゴ同好会ができる

平成8年夏のこと「ネリマ区報」に、小さな案内記事が載った。「アルゼンチンタンゴを聴く会」として、レコードコンサートの詳細がある。アルゼンチンタンゴの文字に懐かしさが湧き、会場も近くと知って心に留めた。当日は少しばかりの不安と躊躇いもあったが出かける。先ずは集った人数に驚いた。5～60人と思われる中の半数以上は女性、ほぼ

全員に共通するのは年配者ばかりのこと、若者の姿は見当たらない。背筋の伸びた長身の男性が発起人のようで、椅子の不足を補充するのに忙しそうだ。予想外の人数になったようで会場内外が混乱している。受付担当は夫人のようだ。思わず夫妻に椅子運びの手伝いを申し出て、初めて言葉を交わした。

会は始まり、主催者の解説でアルゼンチンタンゴばかり40曲も聴いたのが初回、中にわたしの「タンゴ事始め」の2曲もあって胸が熱くなる。翌月も同様、ただ、人数は半減していた。後になって分かったことだが、女性にはタンゴダンスの会と思いついた人がかなりいたようだ。

9月、3回目には、男性会員の一人が解説担当を分け持つことになる。その場で、当時、ワープロを使っていた自分がプログラム作りを打診されて、出来るものやら半信半疑のまま引き受けることになった。

その後、会員数はほぼ30人前後に定着した。解説担当も5人となって毎回、32曲のプログラムが定着する。毎月の例会は、平成25年12月で200回を数えた。現在、練馬区の高齢文化サークルの優良教室として認定されている。

近年の特色は解説者の個性が明確になり、アルゼンチンタンゴは古典と現役若手楽団も、コンチネンタルタンゴに歌謡タンゴ、ラテン音楽も映画音楽もある。仲間内では「ネリタンは五日井の味わい」と自認して気楽さを誇っている。

二次会も和気藹藹と和やかで、明らかにこちらの方が楽しみと見受けられる会員も何人か。発足以来、年月を経て、ネリタン会員の平均年齢は今や70代半ばになった。タンゴ談義ともなれば最良、独断、頑固、偏見が飛び交い、延々と座が湧く。楽しみを共有して談笑する仲間に老いの姿は遠い。

☆タンゴを発祥の地で

ネリマラテン・タンゴ倶楽部に参加して7～8年が経っただろうか。自分ではアルゼンチンタンゴファンの端くれぐらいにはなった気分でした。人生の哀感、男女の愛や情熱、破局を率直に謳うラテン民族の音楽であるタンゴは気取らない。妙にわたしの性に合ったのだ。アルゼンチンタンゴの発祥、巨匠たちの輩出で洗練を重ねていった経緯なども知ることになり、アルゼンチンという国を一度訪ねてみたいと思うようになった。ただ、毎年、知人の誰かが行って帰っては、長時間フライトの難儀を話す。聞くたびに後込みしてわたしの心は決まらない。

決断は突然だった。ジャンルは異なるが音楽好きの友人に声をかけてみると、思いがけず乗り気の返答、その場でツアー参加を決めた。

出発は平成15年11月5日、成田空港に集合したのは日本各地からの30人、何らかの形でタンゴに関わる人達と見受けられた。カナダのトロント経由、チリのサンティアゴにも寄り、25時間のフライトを経てブエノスアイレスに到着する。現地の季節は春から夏に向かうとき、日本の5月ごろの陽気を感じた。着いたホテルはコルドバ通りに面して立地良く、午後の陽はまだ高い。疲れなど忘れて、荷物を下ろすや部屋のカーテンを全開する。上層階の部屋からはかなりの景色が見晴らせる。落ち着いた都会の雰囲気を感じながら、はる

か彼方に投げた視線を徐々に引き戻してくると、視野の一角にうっすらと紫が棚引くような場所がある。この紫こそわたしのジャカラランダ幻想の始まりになったのだ。現地では「ハカラランダ（jacarandá）」と発音することを次の日に知った。

ツアー仲間は現地に慣れた人々が多いようで、滞在中はフリータイムがほとんどだった。タンゴダンスのレッスンに通う人、タンゴ所縁の地を巡る人、レコード探し専門の人、周辺の観光地を訪ねる人などなど。ただ、夜になると殆どがタンゲリーアに集う。いずこのショーも迫力ある楽団演奏に、歌もダンスもドラマ仕立ての華やかさも有りで、たっぷり楽しめる。「エル・ピエホ・アルマセン」ではオスバルド ベリンジェリ、「セニョール・タンゴ」ではエルネスト フランコ、「ラ・ベンターナ」ではカルロス ラサリと其々の楽団の演奏を堪能した。タンゲリーアの夜は更けるほど賑わい、供される特厚ステーキにも山盛りのアイスクリームにも仰天した。ただし、オーダーのときボーイに「ハボン？」と訊かれ「シ」と答えたら半サイズのステーキが現れた。思わず友人と顔を見合って、日本からの先人たちの量を分かっての対応と納得、助かった。何もかもが初体験の友人と二人、自由時間は殆ど街中、周辺を歩いた。



「ラ・ベンターナ」にて、カルロス・ラサリ楽団

「タンゴを発祥の地で」が旅の動機だった。街角にはバンドネオンを弾く老楽士も少年もいる。将来のマエストロ少年は、あどけなさの残る笑顔でわたしたちに、リクエストをと誘う。「ケハス・デ・バンドネオン」を依頼した。サイズの少し小さいバンドネオンを巧みに操っての確かな演奏に、思わずチップをはずんだ。賑やかなフロリダ通りでは、通行人をかき分けての僅かなスペースで、本格的なダンスを披露するカップルに出会う。旅の動機は十分に満たされる日々だった。合間には高速フェリーで、ウルグアイのコロニアまで行く。並木の緑が豊かで美しい町の佇まいが記憶に残る。

ホテル近くのサン・マルティン広場を始め、空軍広場、カフェ「トルトーニ」のある通りの並木など、ジャカラランダの花はあちらこちらで花盛りに向かう時だった。

彼の地のジャカラランダと今年我が家に咲いたジャカラランダには一つだけ違いがあった。ジャカラランダは花盛りにはほとんど葉は見えず、花だけが木を覆うように咲いていた。わたしのジャカラランダは豊かに茂った緑の葉と共に紫色の花が咲いた。気候の違いだろうか。それとも種類の違いなのか、わからない。

夏も終わりに向かう今、この原稿を書いている。重なり合ったジャカラランダの葉は、相変わらず目の前のガラス戸に影を落として、かすかな風にも揺れている。

タンゴに惹かれて飛んだ遠い地、ブエノスアイレスで知ったジャカラランダの花が、我が家にも咲いた。何という幸せ、この自然の采配で、わたしのタンゴへの思いはますます熱い。

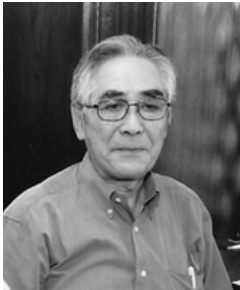
(平成26年8月)

「タンゴと私」

出会いから今日まで

海津喜八郎(伊勢市)

● “南の風” (ビエント・スール)



私はこの曲を聴いてアルゼンチンタンゴが好きになりました。

1955年(昭和30年)伊勢市に「中南米音楽研究会」と言う、アルゼンチンタンゴが8割、フォルクローレ2割位のプログラムでレコードコンサートが始まりました。初回のコンサートでテーマ音楽「ラ・ビルータ」(J・ダリエンソ楽団演奏)が流れ、K氏のアルゼンチンタンゴの部が始まりました。2曲目だったと記憶していますが“南の風”が流れ、衝撃が走りました。コンサート終了を待ちかね、K氏にレコード番号AVL5002を聞きレコード店に走りまわりました。取り寄せまで3日程でしたが、待ち遠しかった事を覚えています。嬉しくて何度も針を落としました。今でも私の宝物の1枚です。この会はK氏が仕事の関係で県外勤務となり、残念ながら2年少しで中断となってしまいました。

● 「タンゴ・アルヘンティーノ三重」(略称:TA三重)

1987年(昭和62年)7月10日の朝日新聞に「アルゼンチン独立記念日の9日、県内初のタンゴ愛好会『タンゴ・アルヘンティーノ三重』発足」と言う記事が掲載されました。会長は以前伊勢の「中南米音楽研究会」でアルゼンチンタンゴの部を担当していたK氏と同姓同名!? まさか! と思い事務局へ問い合わせたところ「以前、伊勢に在住していたらしい」との事。2回目の例会から参加しましたが、矢張りK氏で、32年振りの再会でした。

発足から27年経過しましたが、毎月例会のレコードコンサートは、アルゼンチンタンゴのSPレコード5,000枚を所蔵する澤田義寛氏とNTA会員である吉岡達郎氏(2006年11月まで会長として当会の発展に寄与。現会長は大北惇彦氏)がプログラムを担当。本年(2014年)1月までNTA理事の丹羽宏氏にも長年に亘ってプログラムを組んで楽しませて貰いました。

尚、当会は毎月(8月休会)第4日曜13時30分からコンサートを楽しんでいます。日本のタンゴ界の錚々たるお歴々ではNTA名誉会長の島崎長次郎氏、故石川浩司氏、故芝野史郎氏、西村秀人氏のレコードコンサートも開催し、会員以外の人達も多数が聴き入りました。芝野氏は2年余り月例会のプログラムを担当願いました。

◎1989年10月15日「タンゴ・アモーレス」の生演奏出演を皮切りに、当会主催のコンサートを幾つか開催しましたので列記します。

◎1991年11月「タンゴの夕べ」舩松伸男・大塚典出演。

◎1992年12月「ロス・タンゲーロスの夕べ」

1万円のディナーショーで大盛況)大塚 典、古橋ユキ、岡本 昭、マニエル藤本、エンリケ岩尾、岡 美保子(彼女は松阪出身で現在「TA三重」現会長大北氏の姪)諸氏の出演。

◎1993年7月(TA三重5周年記念)

「バンドネオンとギターの夕べ」小松 勝と亮太父子とロベルト杉浦3氏出演。

◎1994年7月9日「華麗なるタンゴ」

出演はアルゼンチン弦楽五重奏団 指揮&チェロ リカルド・フランシア、特別ゲストとしてバンドネオンにオスバルド・モンテス、歌はウララ・ピニエイロの豪華な顔ぶれ。当日の特筆すべき事は、弦楽五重奏団と言うことで、クラシック・ファンの来場が多く補助椅子を200席ほど増やしたほど。因みに来場者数は1,250名をオーバー。好評、大盛況で予想外の大黒字収支となりました。

◎1995年7月「門奈紀生とアストロリコ」演奏会。

◎1997年9月(TA三重10周年記念)

「小松真知子とタンゴ・クリスタル」のコンサート。この時は亮太氏も同行されました。好評につき

◎2004年6月に再び「小松真知子とタンゴ・クリスタル & Sayaca」演奏会開催。

◎2007年10月(TA三重20周年記念)

◎柴田奈穂、ミゲル・アンヘル・バルコス他のキンテートでゲスト出演島田由美子の皆さん。そして

◎2010年、2011年、2014年各1月に「京谷弘司タンゴ・トリオの夕べ」を開催。毎回250名前後の入場があり大好評でした。

上記以外にも会員のみで聴くミニコンサートが幾つかありました。

●菅平高原タンゴ・フェスティバル

忘れられない事の一つとして1990年9月23～24日「第12回菅平タンゴ・フェスティバル」に参加しました。故蟹江丈夫氏、故芝野史郎氏の名司会・進行で、各地から参加されたアマチュアバンド、グループの生演奏もあり、楽しいひと時でした。

芝野さんは6人のバンドネオン合奏(“ふいご祭り”)で“マール・フンタ”“大きな人形に”などを演奏、蟹江さんは“ロドリゲス楽団”でピアノ演奏を担当されました。

何と言ってもこの時の圧巻は、当時高校2年生の小松亮太君率いるカルテート「アンサンブル・エクスプロー」の演奏でした。全員高校生とは思えない凄腕に驚きました。私の周りで「凄い!」「素晴らしい!」「将来大物になるよ!」と言った声が聞こえました。現在、亮太氏は言うまでもありませんが、あの時のピアノ、エレキギター、フルートの3人も大活躍しておられる事と思います。

もう一つ楽しませて貰ったことは、唯一、プロ・プレーヤーの「志賀 清 トリオ・モデルノス」の演奏でした。ひと通り名曲の数々を演奏され、後は会場からリクエストを受けて殆どの曲を楽譜なしで即興演奏され、流石は(失礼!)プロと感動しました。フェスティバルには初めて参加しましたが、レコードコンサート、生演奏など盛り沢山の楽しい2日間で、本当に良き思い出となりました。

アルゼンチン・タンゴへの想い

小澤 忠 (秋田市)



今年2月に名誉ある日本タンゴ・アカデミーに入会させていただきました。宜しくお願ひ致します。夏に投稿を依頼されましたので拙いながらも、これまでアルゼンチン・タンゴに想いを寄せて来た一端を述べさせていただきます。

40余年前、それまで聴いていた音楽に飽き足らず、リズム、メロディー、ハーモニーにもっと勢いのある音楽を求めて出合ったのが秋田中南米音楽同好会でした。その会員が長い間、蒐集してきたラテン系音楽の中に、自分が求めていた音楽三要素の揃ったアルゼンチン・タンゴに触れて魅せられてしまいました。当時は、ひたすらリスナー会員であった私は、長老コレクター陣のタンゴ・プログラムのLP針音から流れる、スタッカート効いた強靱なリズム、ロマンティックで、メランコリックな主メロディーの泣きが、己の心底に突き刺さり、惹き付けられてしまいました。それ以来今日までその魅力に癒されて来ました。

タンゴ発祥から130年の歴史を持ち、つい先年、世界文化遺産にまで漕ぎ着けたタンゴ。ブエノスアイレスにおいては、アストル・ピアソラ楽団等が出現して以降、来日したタンゴ楽団の数は多くても、心を惹かれる新曲は発表されず、ただ既存曲の編曲に留まり、その楽団の編曲がリスナーの満足に繋がらなく、スッキリしないのが現状ではないでしょうか？

一方、日本国内の既存のタンゴ楽団は、東京を中心としたタンゴ合同フェスティバル等を公開挙行し、タンゴ・ファンを集客しています。我々タンゴ・ファンは各地方から出向き、その痛快なる演奏に満足し、またの公演の視聴参加を約束してきます。それと共に、新規立ち上げの若手小タンゴ楽団等は、地方公演で活躍し、注目を集めようと努力をしています。聴衆の中には、その演奏に虎視眈々として、目を凝らしている地元若者の存在の有ることを目の当たりにしています。

さて、リスナーとして永い間、地元同好会員としても、近隣県と関西、関東等の同好仲間との合宿の音楽交流を通じて、新しい情報交換等で地元では未知の“お宝”とも言うべき沢山の知識を得て、益々の創意工夫をしております。それらは同好会仲間が楽しく過ごすために、大いに次期開催の参考資料ともなります。我々地元会員と共に、ご来客に対する配慮には特に気を傾注して来ております。

これからは、日本全国のタンゴ愛好者のために、“古き佳き時代から現代まで”のタンゴに、未だ聴き不足の方たちへ耳を傾けて戴くために、また若い人達へも自然にタンゴに溶け込んで貰うためにも、従来どおりの公演等はもとより、これからはもっとラジオ、テレビ等の媒体を活用しながらタンゴを伝達すべきです。それなりの資料の整っているNHKなどの電波を活用し、聴視者の目と耳へお届けするために、日本タンゴ・アカデミーも宣伝実行すべきではないかと思えます。かつては、当地の最寄りの放送窓口を叩いたことも有った事を思い出します。またどんどん高齢化が進む時代に、全国のタンゴ好きの長老達（自分も含む）の眠れない夜のために、午前2時から3時までの1時間のタンゴ番組がありました。

今は亡き偉大な先駆者の大岩祥浩マエストロ担当の、NHK第一放送「ラジオ深夜便」の“フォーエバー・タンゴの響きよ永遠に”はアナウンサー泣かせの番組でしたが、月に一回14年間、真夜中に胸をときめかせて聴き入ったものでした。世は正に最大人口を誇る「団塊の世代」の人々も老境に入りました。その方々を穏やかな眠りに誘うために、更に若かりし頃から厳格なタンゴ愛好者である高齢の方々を含め、1時間ほどの胸のときめきを促し、朝までの安眠を助けるためにも、是非、タンゴ・アカデミー役員で、現在油の乗り切った若い方々の新しい感覚のタンゴ解説で、ラジオ、テレビの放送の実現を懇願するものであります。



奈良でタンゴ祭りが開催されます

主宰者の北村 寛さんは本誌2014年春号46頁で紹介した方

出演：アストロリコ、トリオ・ロス・ファンダンゴス、亮&葉月など（チラシから）

日時：2015年1月10日（土） 15時開演（開場14：30）

場所：やまと郡山城ホール（大ホール）

上記は、NTA実行委員の山本雅生さん（神戸市）からお知らせいただいたものです。

閑談 私の和製タンゴ考

～男の散り際は“ガルデル”か“八代亜紀”か?～

佐々木 秋雄 (いわき市)



はじめに

「君も何か書いてみては…」の先達からのお言葉で厚顔にもここに投稿と相成りました。

福島県いわき市。震災被害、原発事故、そしてその後の放射能の風評被害ですっかり有名になってしまいました。悲しい限りです。当地でタンゴやラテン音楽を聞くサークル“いわき中南米音楽同好会”の会員の中にも強制移転や被曝を逃れて移転されてしまった方が現在も居られますが、それでも音楽の灯は消さずにレコ・コンの月例会は続いています。12年になります。その間、島崎会長(現名誉会長)はじめNTA会員の多くの方々にもお越しいただいて、名盤の披露やライブ演奏をして頂いたりしております。余談ですが、このNTAの皆様のご支援が、“田舎の小さな集い”にとっては一過性ではなく、いつまでも楽しい思い出として生き続けていることのお事実もお伝えしたいと思います。有難いことでもあります。ようやく昨今は1920年代のタンゴに興味を持たれる会員も現れて、タンゴ狂の私には嬉しいの一言です。当会の『タンゴ』はこれからです！

◆和製タンゴ第一号? 《いきなりフライング・スタート?》

昭和3年(1928年)のことです。レコード『アルゼンチンの踊』が二村定一(フタムラ・テイイチ)28歳の吹き込みで発売されました。(注:二村氏は昭和初期を代表する流行歌手、ボードビリヤン)伴奏ハッピー・ナイン・ジャズ・バンドのアバネラ混じりのリズムに乗って真面目な歌詞を高らかに?歌っています。曲名から想像して“スワツ、和製タンゴの第一号か”と色めき立ちました。ところが、この曲は原題が『LA BELLA ARGENTINA』で、1912年(明治45年)にカルロス・ロベルトが作曲し翌年に吹き込まれたれっきとした舶来のタンゴであることを後で知りました。作曲者は、アルゼンチン人で、どうもその当時アメリカに在住していた音楽家だった模様ですが、詳細は不明です。



二村定一

思えば、昭和の初期に遠い国の遙かかなたのタンゴが、誰によって日本にもたらされ、

誰によって日本語歌詞が書かれ、当時の超人気歌手の二村が歌うことになったのか？この経緯は今でも私には謎のままです。ここで又、私の“調べぐせ”が疼きます。これも私の音楽の楽しみ方です。と云う事で日本初の和製タンゴではありませんでした。すみませんでした。

『アルゼンチンの踊』 作詞者不明 歌：二村定一 ニットー・レコード#3140b (復刻CDあり)

『LA BELLA ARGENTINA』 EDISON BLUE AMBEROL RECORD #1756 (蠟管・シリンドー畜(?)音)

INTERPRETE NATIONAL PROMENADE BAND 1913 (大正2年)

共にインターネット動画サイトYouTubeでお聴きになれます。

◆和製タンゴも国家統制の塀の中《この頃は未成年者『立入禁止』デス》

昭和4～5年ころ、レコードの普及とともに国家(内務省)による“検閲”が本格化します。“おかみ”に都合の悪いもの、煽情的で猥雑なものなどが発売禁止や放送禁止等の憂き目にあります。我らが“和製タンゴ”も例外ではありませんでした。和製タンゴの発売第一号が昭和5年4月発売の『麗人の唄』(作曲：堀内敬三)はご承知の通り。では和製タンゴの放送に“相応しくない曲”第一号となれば、ズバリ昭和6年1月発売の『ねえ 興奮しちゃ いやよ』に止めを刺すのでは…。卑猥度からすれば昔のアルゼンチンのアグリーベス先生に勝るとも劣らない淫靡な香りのする曲名です。東京放送局(現在のNHK・東京)は早速放送中止にしたとか。“品格と清廉”を旨とする紳士淑女といえども、一たび聴けば、些か身体的にモヤッとした異変を覚えることを禁じ得ないのであります。「♪ああ、なんだか胸がくすぐったい(陰の声「ウム、心にジーンとくるいい詞だなあ～、アンヘル・ビジョルド先生に負けてないぞ)」「しかし、待てよ、この曲何処かで…?」。



和製タンゴの第一号「麗人の唄」が復刻されたCD

リズムに乗って艶っぽく歌われるメロディーはどこか『麗人の唄』の曲に似ている気がします。『ねえ、…』の作詞・作曲が【蒲田音楽部】となっていますが、でも日本音楽の近代化や普及に貢献され、更に放送界でも活躍され、紫綬褒章まで受賞された堀内敬三先生の“欲求不満解消的作品”ではないでしょうか。「勲章がなんだ！何て汚らわしい曲なんだ」、「官憲は厳しく取り締まるべきだ」。常に女色に惑うことなく、タンゴの普及と健全なる青少年育成を願って止まない私としては許せない事象であります。「でも面白そう、この筋の曲もっと探求してみようっと…」。

『ねえ 興奮しちゃ いやよ』 歌：青木晴子 ポリドール #SIB (復刻CDあり)

『麗人の唄』 歌：河原喜久恵 日本コロムビア No.25790A 昭和5年4月発売

(復刻CDあり)

なお、ニッポノホンの曾我直子も同曲を録音・発売した ①昭和6年 No.17491 昭和7年 No.17709

◆高齢者が選ぶ感動の和製タンゴ

“タンゴの守旧派”の私。でも一度ハマってみると、まるで畳を新しくしたときのようなトキメキ、(筆者注：女房は新しくしてません!)それが“和製タンゴ”でした。これまでに知人や友人から多くの音源や資料を頂戴し(船橋市在住の和製タンゴ愛好家でNTA会員の久敬二氏には殊のほかお世話になりました)その結果、あれやこれやの音源でCDを作り21枚ほどに纏めました。この私製CDをタンゴ界の大先輩でお付き合い頂いている【東京・すいよう会】の黒木皆夫会長と、【福島タンゴとフォルクローレの会】菊池久利代表のお二人にお聴き頂くことにいたしました(共にNTA会員)。そして、300



曲強の和製タンゴの中から、私を含めた3人の高齢者?による“究極の和製タンゴ ナンバー・ワン”選びを各自で行なったのでした。その選定結果曲が驚くなかれ3者が全く一致してしまったのです。3者が選んだその曲の名を発表します。『ぬくもり』歌：並木路子であります。「♪愛の絆に縛られて 想い切ない ぬくもりよ〜」。恥じらうが如き女の恋情を、切々と歌う熟女・並木さんはまるで全盛期のアスセナ・マイサニであります。また、歌と歯切れのいい伴奏が対話するかのような進行は、タンゴ好きで知られる船村徹先生ならではの手法。胸にジーンとくる大人の情念を彷彿とさせてくれます。無名曲との出会い、これも又音楽好きだけが味わえる感動のときであります。尚、この選曲へのご異論・ご意見は受け付けておりません。

『ぬくもり』作詞：石本美由起 作曲：船村徹 歌：並木路子 (56歳時の録音)

伴奏：日本コロムビア・レコーディング・オーケストラ

日本コロムビア AK-49 昭和52年発売 45rpm EP盤(菊池久利氏所蔵)

◆男の散り際は“カルロス・ガルデル”か“八代亜紀”か?

世界のタンゴ界を揺るがす永遠の課題に鋭く切り込みます。私製CDを作るのが最近の楽しみです。タンゴは言うに及ばず、ジャズ、カントリー・ウエスタン、ラテンそして和製タンゴに歌のない歌謡曲。これらを前出の黒木会長や菊池代表に、ご迷惑も顧みずお届けします。最初の頃は、電話口で大変喜んで頂いている様子が目に浮かぶのでした。ところが、昨今はダメです。私には分かるんです。特にカナロやパチョやOTV…、冷めた儀

礼的御礼だけで、電話はすぐに切れてしまいます。それならばと、最近某女の歌謡曲集をお届けしたのですが、感涙溢れんばかりの狂乱ぶりでした。確認ですがお二人共現役の“タンゴ会の会長さん”です！そう言えば、50年来の悪友でタンゴ狂の岩崎永一君（惜しくも逝去。カナロのSP盤収集で有名。遺言で戒名にタンゴ《澹悟》が入っているほどの熱狂者）が亡くなるほんの数カ月ほど前に、か細い声で「おい、恥ずかしながら、フランク永井のCDを作ってくれよ、どうしても聴きたいんだ」。事実なんです。考えても見て下さい。男の散り際に、ガルデルのスペイン語で歌う『我が悲しみの夜』やカナロ演奏の『パルトーロ』で人生終



われますか、意味も分からないのに！やっぱり、日本語で八代亜紀さんがハスキー・ボイスでシミジミ歌う和製タンゴ『私にお世話を…』で終わりたいです。「♪あなたが深酒しないように 私にお世話をさせて下さい…」。これを聴いたら“散る”のは延期だ。後期高齢のあなただって『失樂園』の世界に浸れるんです。ついでに八代さんの代表曲『舟唄』も好きです。特に「♪女は無口な 方がいい〜」の名フレーズは私が歌うと必ずフォルティッシモになります。（この項、うちの母ちゃんには内緒です。だって、きまって倍返しですから）。

『私にお世話を…』 作詞：池田光男 作曲：鈴木 淳 歌：八代亜紀

テイチク RE-510 45rpm EP盤（菊池久利氏所蔵）

結びにお詫びをひとこと

『ひとの悪口を言わない』『艶話はしない』を心に決めました。立派な人格者になりたいからです。そうしたら、話のネタがなくなり、一寸した老人性の鬱病になりました。やっぱり私には、『下世話』が似合うみたいです。恥ずかしながら……。

そんな性格が災いしてか、最後の最後まで品格や格調とは無縁の閑談になりました。閑談にお付き合い下さった方々には御礼を申し上げます。また、浅学非才な私に投稿をお勧め下さいました島崎名誉会長、清水 裕氏の各位には感謝致すと共に、自らの不徳をお詫び申し上げる次第です。

「古いタンゴ楽譜集あれこれ」

清水 裕 (杉並区)



1997年と2000年、かつての中南米音楽社主催の「タンゴの好きな仲間たち」ツアー（石川浩司団長）に参加した。2度目のブエノスアイレスのドレーゴ広場の蚤の市で、紙が茶色に変色し、端がぼろぼろになったかなり古い楽譜集を入手した。ホテルに戻り、先輩諸氏に自慢げに観て貰ったが“大した価値の無いものでは、”とのことであったので、私も帰国後あまり興味が湧かず、歌の好きな友人に貸してあった。

元の持ち主は多分歌のタンゴが大好きだったようで、表紙には「Joya de colección! Grandes Tangos」とある。La cumparsitaのような有名曲から無名曲まで約120曲で、半分くらいは歌詞やサイン入り。サインは本物ではなく、多分楽譜購入者へのサービスで、サインをゴム印化したものを捺印したのではないかと思う。

あれから16年、最近私の手元に戻って来た。久し振りに頁をめくると写真や挿絵が興味深い。



●写真では

「¿Por qué lloras muchacha?」(MはMúsica 作曲者 LはLetra 作詞者 以下同じ)

M : Rafael M. Sánchez L : Edelmiro Garrido 歌 : Azucena Maizaniのほかに

「El carrerito」

M : Raúl de los Hoyos L : Alberto Vaccarezza 歌 : Olinda Bozán

「La clavada」

M y L : A. J. Trelles 歌 : Blanca Iris

「Y era buena」

M y L : Virgilio R. Carmona 歌 : Lidia Di Carlo

など、余り知られていない女性歌手も。

●挿絵ではコミカルなものが多い。

例えば「Adiós, muchachos」は『タンゴ名曲事典』（石川浩司編 中南米音楽社刊）の第21頁掲載のものと同じだが、思わず笑ってしまう。死期が近い男が別れを告げようと思

い出しているのは、ワインのボトルと数名の女性。彼が愛撫している女性以外は、母親(?)を含めて皆が怖い目つきで彼を見つめているのではないか。

この楽譜集で私が知らない約50曲の中には隠れた名曲が含まれているのではないかと思う。

それらの中から何曲かを記すと、

「Adiós, Ninón」

M : A. J. Tagini L : Francisco G. Jiménez

「Aquella canción」

M : A. Gentini L : F. Canosa

「Buena suerte」

M y L : P. V. Lambertucci

「Cancionero」

M : Manuel Buzón L : Ismael R. Aguilar

「Chonguita」

M : Mario Canaro L : J. Gradito

「Coperito」

M : Adolfo Mondino L : Víctor Solino

「El taita ladrón」

M : Francisco Canaro L : Juan A. Caruso

「¡Llanto!」

M : Miguel Buchino L : Diego Flores

「Mártir」

M : Emilio González L : Mario Battistella

「Otro tango」

M : Rafael Iriarte L : Enrique Cadícamo

「Raja del barrio」

M : Arturo De Bassi L : Pablo Suero

など。これらの曲を聴く機会があればと楽しみにしています。



左端が筆者、一人置いてオスバルド・プグリエーセ夫人

会員アンケート

Chiqué 3 曲選

第 2 回発表

笠井正史 (武蔵野市)

- 1. オスバルド・プグリエーセ楽団 (オデオン 1953年)
- 2. イグナシオ・コルシーニ (オデオン 1928年)
- 3. フランシスコ・カナロ楽団 (オデオン 1929年)

3 曲にまつわる思い出

1. オスバルド・プグリエーセ楽団のチケー

名曲チケーの話をするとなれば先ず以てオスバルド・プグリエーセ楽団のチケーを挙げなければならない。この演奏を最初に耳にしたのは多分高校2年か3年頃にラジオで高山正彦氏の解説の番組であったかとおぼろげに覚えている。これほど完成度の高い演奏は滅多にないのではないかと、素人乍らに引き込まれたのであった。その後何とかこのレコードを入手したいと思ったが中々見当たらず、ようやくEP盤で「カナロ・エン・パリ」のB面にあったのを手に入れ、何度も聴いた覚えがある。第一バイオリンがまだエンリケ・カメラーノの時代の録音であったが、それとアニセト・ロッシの力強いコントラバスが何とも言えない演奏で、この曲は矢張りオスバルド・プグリエーセ楽団でなければ、とその後長い間思っていたのであった。

2. イグナシオ・コルシーニのチケー

チケーは通常器楽(昨今インストとか言っているが)で、歌われることは少ないようであるが、作曲者のリカルド・ルイス・ブリグノーロ(イタリア式にブリニョーロと発音する向きもあるようであるが)はこの曲に詩も付けているので、誰か歌っている筈だと思っていた処、イグナシオ・コルシーニの復刻版にギター伴奏で入っていた。録音は1928年とあるので、当時に相応しい懐かしい音で聴くことができ満足したものである。

3. フランシスコ・カナロ楽団のチケー

これほどの名曲をあのカナロが取り上げていない筈はないと思ひ、カナロのレコードを色々物色しても中々見当たらなかったが、カナロ没後3回忌の3枚盤に取り上げられていたので、これで初めてカナロのチケーを聴くことができた。島崎長次郎氏の解説で1929年のセリエ・シンフォニカ時代の録音と書いてあり、ことによるとフランシスコ・カナロ自身がまだバイオリンを弾いていた頃のものかと思ひ、そうでなくても多分そうであろうと勝手に解釈している。

杉山滋一

名曲だけに数多くの演奏があるが、以下の3曲を選んだ。ただしそれぞれの数字は1位から3位を表わすものではないことをご承知願います。

1. Osvaldo Pugliese y su orq.tip. (grab. 1953 Odeon)

Pugliese楽団の演奏の中でも屈指の名演でコメント不要。

2. Aníbal Troilo y su orq. tip. (grab. 1952 tk)

1944年Victor録音と比べてわずかにテンポを落として厚みのあるハーモニーと重量感あるリズム、ニュアンスあふれるソロと言うことなしの演奏。

1. 2. 共に評価の定まった名演奏である。

3. Estrellas de Buenos Aires (grab. 1960 Odeon)

冒頭から第3主題がHugo Baralis (vn) の流麗な調べで歌われやがて切れ味するどく Jorge Caldara (bn) のリズムに導かれて曲が進んでいく。特記すべきは演奏の基盤に Armando Cupo (pf) と Enrique Quicho Díaz (cb) のベース・ラインである。それぞれに見事なソロプレイも披露するが、何と言っても土台のしっかりとした緊張感のある演奏を作り上げている。四重奏とはとても思えない充実した素晴らしいパフォーマンスだ。

鈴木一哉

1. TRIO CIRIACO ORTIZ 1939年 VICTOR 38644 [78rpm] AMP CD-1112 [CD]

トリオ・シリアコ・オルティスによる終始快調に歌った演奏。50年代にも録音しているが、ここでは39年の録音をあげたい。リズムカルな切れ味と進行感を保ちつつ、あの唯一無二のバンドネオンのセンチメントな歌い口を両立しているのはまさに奇跡ではないか。以下、敢えてオルケスタの演奏は外して選んでみました。

2. ESTRELLAS DE BUENOS AIRES 1960年 ODEON DNO-55413 [LP] EMI 0094 63626902 3 [CD]

モダン派小編成による同曲の録音としては最初期に属する名演だ。この後、モダン派小編成では、ピアソラ五重奏団2種（ライヴの空気感が凄いメロペア盤に注目してほしい）、ニチューレ四重奏団、トリオ・バッファ＝ベリンジェリ、バングアトリオなどの録音が続くことになる。この演奏は、ジュンバ調のリズムも顔を出しており、メンバーのソロを贅沢に配して聴きごたえ十分だ。クーポ、カルダーラ、バラリス、キチョいづれも絶好調である（キチョのソロあり！）。また、冒頭バラリスのソロでいきなり第3

部の旋律からスタートする編曲という点も珍しく注目したい（同様の趣向による編曲としては、例えば、レケーナ楽団の録音があり、そちらではグレーラのギター・ソロをバックにスアレス・パスが第3部の旋律を奏でて始めている）。

(3) OSVALDO TARANTINO 1991年 MELOPEA DISCOS CDMSE 5061 [CD]

この深い心に溢れる演奏を前にして特に加えて語るべき言葉はありません（1曲だけ取り出して聴かずにCD全体を通して聴きたい）。

原田 登（松本市）

1. Carlos Figari y su trío (レドンデルL-801)

3つの楽器の絡みが素晴らしい。Figariのピアノが前に出たり引っ込んだり、そしてバンドネオンが巧みだ。コントラバホはしっかりと存在感を示し、終始二つの音を守っている。

2. Donato Racciatti (ベネスエラ BL-182)

予想通りの本当に楽しい演奏だ。ソレ行けヤレ行けとばかり、あっという間に聴かせてしまう。一時期 Reynaldo Nichele の演奏が好きだったが、こういうグイグイ進めるものも一興ではないだろうか。

3. Francisco Canaro (垂オデオン DNO-55552)

本当に楽しませてくれる。次から次へと名手たちの音が出て来て、この後はどうなっていくんだろうと思わせる。この演奏をこの曲のサンプルにしたい気持ちになる。最初にこの一枚で耳にしまったので拘りがあって、この曲を聴くための一枚になっている。LPレコード向けのものをざっと見ただけで現在32ほどの演奏が聴ける。CDを調べればまだまだ出て来る気がしている。

山本幸洋

1. Aníbal Troilo y su Orquesta Típica / Ayer, Hoy y Siempre / DM70.050 / 1952

2. Osvaldo Pugliese y su Orquesta Típica / チケー / 東芝音工OW1033 / 1953

3. Orquesta del Tango de Buenos Aires / ditto / RCA Víctor TLP5141 / 1983

それぞれ比類なき個性があるのでリストは録音順。テーカーのトロイロ楽団だからピアニストはカルロス・フィガリ。失敗レコーディングを除けば、この期のトロイロ楽団は名演の宝庫であるが、剛性感の強いピアノが曲のマッチョ感覚を全面に押し出したド迫力の名演。プグリエーセ楽団の53年録音もまた、楽団史上もっともマッチョな時代であるが、プグリエーセ楽団の奥義である緩急自在の、シンコペーションの効いたスタッ

カートと濃密なロマンティシズムのレガート、その対比にほれほれする名演だ。ブエノスのタンゴ楽団は、カルロス・ガルシアとラウル・ガレーロが音楽監督を務めるブエノスの市立オーケストラ。有名曲重視であるし編曲も中庸を行くようなイメージだが、そこここにガルシア＝ガレーラの痕跡がある。ヴァイヴやハーブでさりげない装飾を施しているがガルシア好みの低音のプリプリ感もいいし、メランコリックなピアノ・ソロも美しい。ガルシア関連ならエストレージャス・デル・タンゴの71年録音も良いけど、今回は市立オーケストラの豪華さに軍配を上げたい。



NTA 日本タンゴ・アカデミー
LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPON

日本タンゴ・アカデミー(NTA)がおくる

第4回 ミロンガ パーティー

●演奏 メンターオ +2



●ダンス・デモ
タンゴ・プラネット
「利幸&舞子」



2014年 11月8日(土)

●時間 18:30~21:30

●場所 **いきいきプラザ一番町** カスケードホール

(102-0082 東京都千代田区一番町12 TEL: 03-3265-6311 地図は裏面にあります)

●参加費 **2,500円** (要事前申込み)

主催:日本タンゴ・アカデミー HP <http://tangoacademy.jp> 後援:(株)ラティーナ

新・訳詩クニナ

大澤 寛

Chiqué (2)

Letra y música : Ricardo Luis Brignolo

Chiqué (1) (本誌前号記載)と同じ作者による作詞作曲です。もともと(1)(2)共にあまり歌詞は唄われなかったそうです。それにしても(1)と較べて(2)の詞のなんと凡庸でつまらない内容であることか。(2)は1943年から49年までの検閲の時代をやり過ごすためのものです。検閲を行う政府側に対する“これなら文句は付けようがないだろう”という気持ちを表しているように思えます。

お前には礼を言いたい お前の愛が
 俺の傷ついた心に 命を注ぎ込んでくれるから
 俺の情熱の焔に お前が鮮やかに火を付けてくれてから
 その情熱は 限りない憧れを抱く激しい恋心に変わった
 俺にとってのお前は 聖なる母親のようだ
 お前の心の優しさの中に いつも俺は光を見つけていた
 夢に満ちた夜明けの光を

お前は这个世界に 心地よい^{かくわ}香しさと
 この上ない清らかさを 与えに来る
 お前の 優しく人を魅了するような歩みは
 心をとらえる小鳥のようだ
 お前はキューピットの矢みたいだ
 咲いたばかりの花が そよ風に揺れているみたいだ
 神が微笑んでいるみたいだ

俺にとってのお前は 太陽だ
 そして 恋の夜を照らす月だ
 昔お袋が庭に植えた 美しい赤いバラだ

俺はいつもお前を 汚れの無い
 純粋な魂の持主として
 崇^{あがめ}拜するものになろう
 お前は空のあの高みからの励まし
 俺はいつも お前の^{しもべ}下僕でいよう

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

- ◎関西リンコン 日 時：11月9日（日）
会 場：「サロン・ド・あいり」
- ◎東京リンコン 日 時：11月4日（火）
会 場：「原宿クリスティー」
- ◎中部リンコン 日 時：11月30日（日）
会 場：ライブハウス「ジャズ・テーク・ゼロ」
- ◎セミナー 日 時：11月23日（日）・12月14日（日）
会 場：「東医健保会館」

会 員 動 静

(2014年10月10日現在 185名)

入会者

ファン・リオス（東京都）

退会者

大橋英夫（横浜市・逝去）

次号の原稿締め切り日

Tanguendo en Japón（2015年1月発行）：2014年11月30日

Tangolandia（2015年4月発行） 2015年3月15日

編集後記

今号も多くの皆様のご協力でバラエティに富む内容になりました。久し振りの執筆は加藤光夫さん（小樽市）、初登場は掲載順に山本嘉子さん（練馬区）・海津喜八郎さん（伊勢市）・小澤 忠さん（秋田市）です。連載では「思い出のタンゴ喫茶巡り」が最終回となり、新しく島崎さんの「Cambalache」が始まりました。会員アンケート「私の好きなChiqué 3選」にも皆さまどうか奮ってご応募下さい。（大澤）

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」（非売品） 第29号 2014年10月 発行

発 行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104（飯塚方）

電話&FAX 03-3324-1989 E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編 集 部：大澤 寛（編集長） 〒162-0051

東京都新宿区西早稲田2-1-23-609

TEL 03-3208-2247

E-mail hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

齋藤富士郎・弓田綾子・宮本政樹・島崎長次郎

表紙デザイン：脇田富水彦

印 刷：株式会社 藤印刷 〒102-0072

東京都千代田区飯田橋2-13-1